

第6回 石川県書写書道教育研究大会

目 次

1、挨拶・祝辞

石川県書写書道教育連盟会長 第6回石川県書写書道教育大会長	藤 則 雄 -----	1
石川県教育委員会教育長	寺 西 盛 雄 -----	2
鹿島町教育委員会教育長	中 出 寛 -----	3

2、第6回石川県書写書道教育研究大会要項 ----- 4

3、公開授業学習指導案

鹿島町立越路小学校 教諭	西 脇 良 樹 -----	6
--------------	---------------	---

4、研究発表

石川県立七尾養護学校 教諭	清 水 徳 典 -----	9
石川県立七尾養護学校 教諭	高 橋 昭 夫 -----	

5、研究誌上発表

津幡町立中条小学校 教諭	北 野 京 子 -----	3 3
加賀市立南郷小学校 教諭	北 村 千 恵 -----	3 9
金沢市立浅野川中学校 教諭	八 田 和 幸 -----	4 3
石川県立寺井高等学校 講師	山 本 尚 美 -----	4 9
金沢大学大学院教育学研究科	新 谷 幸 一 -----	5 5

6、石川県書写書道教育連盟のあゆみ ----- 6 3

7、平成7年度石川県書写書道教育連盟役員一覧 ----- 6 5

8、第6回石川県書写書道教育研究大会役員一覧 ----- 6 7

9、石川県書写書道教育連盟規約 ----- 6 8



ご 挨拶

石川県書写書道教育連盟会長
第6回石川県書写書道教育研究大会長
藤 貝 雄

このたび、石川県の各地で、書写書道教育にたずさわっておられます教育者・研究者のご参加をえて、第6回石川県書写書道教育研究大会を、能登地区の諸学校を会場として開催することになりましたことは、誠に喜ばしいことであり、研究のご発表をされます方々やご参加下さいました各位と共に、心からのお慶びを申し上げます。

さて、幼稚園から大学に至るまでの、各校園・大学を、書写書道教育の一貫性・有機的連携性の目的をもって連盟化するという、全国に先がけての本会の結成は、発足の当初はもとよりのこと、今日でも、他の都道府県にその例を見ないことであり、また、他の教科でも知ることのできない、誠に有意義な組織でありますことは、衆目の一致するところとして、高い評価を受けているところであります。そして、今回に至るまでの6年有余の間、当初の連盟の目的どおり、授業研究を中心に据えて、石川県内の幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・特殊教育諸学校の書写書道教育の発展のために努力され、連盟会員相互の親睦のためにも心を至してきたところであります。その成果は徐々にではありますが挙がりつつあるところであり、今後の更なる発展に期待の持てるところであります。

当初、本研究大会の開催地をローテーション方式とし、或る特定の地域の人達だけで運営されることなく、更なる将来への発展のためにも、輪番方式を目指してきましたが、これ迄は、何分にも発足間もないということもあって、開催地が金沢地区に限定されてきましたが、昨年からは、ようやく小松地区で、また本年は能登地区で、金沢以外の地区でも開催できるようになったことは、本連盟の力量がついたことの証であり、会員諸氏のご協力の賜物であろうかと確信致しているところであります。

第6回研究大会の為に、ご遠路から講演のためにわざわざご出席下さいました講師の二松学舎大学 浦野俊則教授に、また大会を目指して、今日に至るまで日夜研究発表のために研鑽してこられた研究発表の先生方、本大会を成功裡に導くべく会場の設営等にご盡力下さいました実行委員の各位に、心からの敬意と感謝の意を表したいと思えます。更に、石川県下の各地より本大会参加のために遠路はるばるご出席下さった先生方にも、その熱意に敬意を表したいと存じます。

最後に、石川県書写書道教育連盟が、会員各位の不断のご努力とご協力とによりまして、今後ますますの発展、会員各位のご健勝と研究・教育のご発展とを心から祈念致しまして、第6回研究大会に当たってのご挨拶と致します。

(金沢大学教育学部長)

祝 辞



石川県教育委員会教育長

寺 西 盛 彦

第6回石川県書写書道教育研究大会の開催を心よりお祝い申し上げます。

昨年の小松地区での開催に引き続き、本年は能登地区での開催と、本大会が県内全域への広がりの中で発展されていることは、本県の書写書道の充実発展を示すものであり、関係各位のご尽力に深く敬意を表すものであります。

昨今、社会の変化はめまぐるしく、学校教育においても、児童生徒の多様な個性に対応した、新しい教育実践が行われているところであります。

特に、子どもたちの感性を伸ばし、豊かな心を育む教育は今後ますます重要になっていくと考えられます。石川県書写書道教育連盟が大会テーマに、一貫して掲げてこられた「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」は、時代の要請に応えたものであり、今後の成果に大きな期待を寄せるところであります。

本大会の小学校の公開授業では、「自己批正とペア学習を生かし、文字意識を高める書写学習のあり方」というサブテーマが掲げられております。文字意識を高めるため、わが国の誇りでもある日本の文字を自ら学ぶ意欲を育むための論議が一層深まることを期待するものであります。

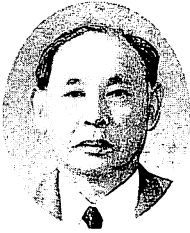
また、養護学校の教育実践では、知的な遅れを持つ生徒たちが書道に取り組む姿をとおして、教育の根幹に触れる大きな示唆が得られることと思います。

このような校種を越えての研究実践は、教師に広い視野を与え、実践的指導力を高めるものと確信いたします。

ワープロが普及し、マルチメディア化が進み、文字を美しく書く機会が少なくなっていく現代において、書写書道教育は一層重視されなければなりません。幼稚園から大学までの幅広い研究組織を持つ石川県書写書道教育連盟の、さらなる発展を願うものであります。

最後になりましたが、本大会の開催に向けて準備に当たってこられた関係各位のご労苦に感謝申し上げますとともに、今後ますますのご活躍を祈念し、祝辞といたします。

祝 辞



鹿島町教育委員会

教育長 中出 寛

第6回書写書道教育研究大会が、鹿島町生涯教育センター・ラピア鹿島に、公開授業が越路小学校に開催されることを、地元の教育委員会として心から歓迎申し上げます。

書くということは、読むことを含めて、人が生きて行く上に絶対に必要なことであります。それ故、学校教育は勿論、家庭教育や社会教育においても、系統的、段階的に指導が進められています。人は常により美しく、より好ましく表現することを願います。書には、正確に書くという実用性、機能性に加えて、造形的、芸術的な美しさが望まれます。さらに後漢の揚雄という人が、「言は心の声であり、書は心の画である」と述べているように、書は書く人の人格を表します。符号としての文字に造形的な創意を加えることによって、書く人の人間性が表れてきます。「基礎、基本をふまえて、豊かな心を育てる書写・書道教育」とはまさにこのことにほかならないと思います。

人は誰でも上手な字を書きたいと願います。しかし「自分は悪筆だ」と決め込んでしまう人もいます。書をちょっと練習してみて、はかばかしくないと「私には字を書く能力がないのだ」と諦めてしまうからです。これではみずから能筆家になる道を閉ざしてしまっているのです。「美しい字、正しい字は誰にでも書けるのだ。多少の努力はいるが、正しく練習すれば誰もが上達できるのだ」基礎、基本を教える小学校の段階において、あまり字の上手でない子にこう信じ込ませることは、技術以上に大切なことではないでしょうか。それには倦まずたゆまず練習をつづけさせなければなりません。何事であれ、練習や努力には苦痛を伴うのが普通であります。しかしそれでは積極的な勉強にはなりません。習字を学ぶという気持ちでなく、楽しむ、楽しいからやる、そして飽きたり、苦痛になつたりしないように工夫する。このような授業のあり方も大切だと思う次第です。「楽しく、意欲的に活動できる書写の授業でありたい」と願う公開授業の意図も、書写を好きにさせ積極的、継続的に取り組ませる指導方針から出ているものと思います。本大会がみのりの多い大会になることを期待して止みません。

最後になりましたが、本研究大会の開催のために御尽力いただいた関係者の方々に敬意を表し、石川県書写書道教育連盟が今後益々発展されんことを祈念してお祝いの言葉いたします。

第6回 石川県書写書道教育研究大会要項

大会テーマ

「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」

記念講演 講師 浦野俊則先生
 (二松学舎大学教授・全国大学書写書道教育学会常任理事)
 演題 「漢字は生きている」

期 日 平成 7年 10月 20日(金)
 会 場 ラ ピ ア 鹿 島
 鹿島町立越路小学校
 主催 石川県書写書道教育連盟
 後援 石川県教育委員会
 鹿島町教育委員会
 石川県私立幼稚園協会

日 程
 10:30 11:00 12:00 13:00 :35 14:20 :50 15:20 16:30

受付	研究発表 (ラピア鹿島)	昼食・移動	受付	公開授業 (越路小学校)	移動	研究協議会 (ラピア鹿島)	全体会 記念講演
----	-----------------	-------	----	-----------------	----	------------------	-------------

研究発表・研究協議会 養護学校 (11:00~12:00)

「知的な遅れを持つ生徒における余暇指導 -書道を通して-」

	発表者	司会者	記録者
研究発表 養護学校 (高等部2年)	石川県立 七尾養護学校教諭 清水徳典 高橋昭夫	石川県立 明和養護学校教頭 田中行雄	石川県立 鶴来高等学校教諭 広畑登代子 津幡町立中条小学校教諭 北野京子

公開授業 小学校(13:35~14:20)

自己批評とペア学習を生かし、文字意識を高める書写学習のあり方

校種	学年	題 材 名	授 業 者
小学校	5	「放送」(文字の組み立て方)	西脇良樹教諭(鹿島町立越路小学校)

公開授業のご紹介

小学校第5学年 「放送」(文字の組み立て方) 西脇良樹教諭 (鹿島町立越路小学校)

—— 自己批評とペア学習を生かし、文字意識を高める書写学習のあり方 ——

第5学年での毛筆を使用する学習においては、文字を一層正しく書く能力や態度を育てるとともに、一字一字の文字の形を整えて書く技能と態度を養うことが大切とされています。

この授業では、児童が自分の課題をしっかりと持ち、自己批評をすることにより文字意識を高めることをねらっています。自己批評では、学習の基準をそれぞれが理解したで、友だちとのペア学習が試みられます。

また、練習過程においては、自分の課題に応じた練習用紙を使って段階的な練習が工夫されています。「楽しく、意欲的に活動できる書写の授業でありたい」と願われる西脇先生。「書写教育には一からの出発だった」と謙遜されますが、熱心に取り組まれた成果は子どもたちの意欲的な姿に表れていることと思います。

研究協議会 (14:50~15:20)

	助 言 者	司 会 者	記 録 者
研究協議会 小学校 公開授業 を中心に 14:50~15:20	七尾地方教育事務所 指導主事 帽子山瑞枝 金沢市立中央小学校 教諭 林 道子	中島町立笠師保小学校 校長 笹 川 尚	小松市立稚松小学校 教諭 四日悦子 富来町立増穂小学校 講師 唐津清美

全体会(15:20~16:30) 司会者 永井志津子(七尾市立北嶺中学校長)

- ・挨拶 石川県書写書道教育連盟会長
- ・祝辞 石川県教育委員会教育長・鹿島町教育委員会教育長

第5学年国語科書写学習活動案

児童 鹿島町立越路小学校 5年1組
男子13名 女子9名 計22名
支援者 教諭 西脇良樹

1. 単元名 文字の組み立て方（によう）「放送」

2. 目標

- ・文字の組み立て方（によう）に注意して、「放送」を書くことができる。
- ・自分の課題を見つけ、進んで学習することができる。

3. 学習するにあたって

第5学年での毛筆を使用する学習においては、文字を一層正しく書く能力や態度を高めるとともに、一字一字の文字の形を整えて書く技能と態度を養うことが大切とされている。ここでは、によう、たれ、かまえのある文字の左右、上下、内外から成る文字の組み立て方や形を整え方を学習する。また、毛筆での学習を硬筆での学習にも生かすことが重要な課題となっており、にようを持つ文字を硬筆で学習する。

児童の硬筆の文字を見ると、文字を整えて書くという意識はなく、乱雑に書く傾向が強い。また、毛筆と硬筆は別のものでとらえている児童もいる。毛筆でも硬筆と同じ傾向が見られ、筆使いや筆運びはよくない。そこで、授業や朝自習、家庭学習などで、始筆、送筆、終筆や一点一面の指導を補っている。最近では、徐々に一人一人が文字意識を持って授業に取り組むようになってきた。

一人一人が意欲的に学習するためには、各自が自分の課題をしっかりとつかむことが重要である。そのために、児童はまず試書をして、分解文字を操作し完成させる。次に、児童の話し合いにより学習の基準をつかませている。基準をつかんだ後は、試書の自己修正をしてペアの話し合いなどで自分の課題をつかむようにしている。練習過程でも、自分の課題に応じた段階的な練習用紙を選択して練習している。最後には上達を認め合い、学習成果の喜びを味わうようにしている。

4. 学習計画（総時数4時間）

- 第一次 点画の方向や長さに注意して「放」を書く……………1時間
- 第二次 しんにようの書き方に注意して「送」を書く……………1時間
- 第三次 文字の組み立て方に注意して「放送」を練習する……………1時間（本時）
- 第四次 「放送」を清書する。にようのある文字を硬筆で書く…1時間

5. 本時の学習（第三次）


(1) ねらい

- ・文字の組み立て方に注意して、「放送」を書くことができる。
- ・文字の中心や上下のバランスに気をつけて書くことができる。

(2) 授業の視点

- ・自分の課題を持って、意欲的に学習できたか。（自己批評、ペア学習）
- ・練習した文字がどれだけ課題に到達したかを見極めることができたか。（文字意識）

(3) 展開

学 習 活 動	配時	思 考 の 流 れ	教 師 の 支 援
1. 学習のめあてをつかむ	1	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 文字の組み立て方に注意して「放送」を書こう </div>	
2. 試し書きをする	5	・筆順を確かめながら試し書きをする	・姿勢、筆の持ち方に気をつけるように働きかける
3. 学習の基準を知る	10	・分解文字を操作し、正しいと思う「放送」をつくる ・できあがった文字から、基準について話し合う	・基準を知る手だてとして分割した文字を提示する ・分解文字と手本を比較しながら、基準をおさえるようにする
		基 準 ・文字の中心や大きさ ・文字の上下のバランス ・左右の払いの美しさ	
4. 自分のめあてをもつ	9	・基準にそって自己批評する 試し書きを赤ペンでチェック ・友だち同士で問題点を話し合う	・基準にそった自己批評ができていないかアドバイスする ・友だち同士で問題点の意見交換ができるように働きかける
5. 練習をする	12	・めあてに応じて、練習用紙で各自練習する	・自分のめあてに応じた練習用紙が選択できているか
6. まとめ書きをする	5	・めあてを確かめてからまとめ書きをする	・めあてを再度意識しながら清書しているか、友だち同士で確認する
7. 試し書きとまとめ書きを比べ、相互批評する	3	・学習の成果を話し合う	・試し書きと比較して上達を認め合い、文字を書く楽しさを味わうようにする

Memo :

1. 關於本會之組織及業務範圍，業經本會董事會決議，除將本會之組織及業務範圍，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

2. 關於本會之經費來源，業經本會董事會決議，除將本會之經費來源，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

3. 關於本會之辦事處，業經本會董事會決議，除將本會之辦事處，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

4. 關於本會之職員，業經本會董事會決議，除將本會之職員，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

5. 關於本會之業務，業經本會董事會決議，除將本會之業務，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

6. 關於本會之附屬機構，業經本會董事會決議，除將本會之附屬機構，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

7. 關於本會之其他事項，業經本會董事會決議，除將本會之其他事項，分別列明於本會章程及業務範圍，並分別呈請內政部及社會部備查外，並分別呈請內政部及社會部備查。

研 究 発 表

知的な遅れを持つ生徒における余暇指導

— 書道をとおして —

石川県立七尾養護学校 教諭 清水 徳典
教諭 高橋 昭夫

1. 養護学校の概要と書写指導の動機・概要について

◇七尾養護学校の概要◇

本校は昭和54年に創立され今年で17年をむかえる。能登における唯一の養護学校として広く能登の各地域より生徒が集まっているため、自宅からの登下校が困難な生徒が多く、本校では寄宿舎が設けられている。全校生徒（小・中・高等部・在宅訪問・七尾病院）125名のうち舎生は64名と他の養護学校に比較すると多い。

また、精神薄弱といってもその特性は一様でなく、ダウン症の生徒、自閉症の生徒、脳性麻痺による肢体機能に障害を持つ生徒など多様である。

近年本校では、高等部の生徒数の全体に占める割合が増加しており、今年度は125名のうち56名と約半数を占めている状態である。高等部の生徒は卒業後の就職及び社会生活という観点が重視され、普段の学習活動でも1週間に12時間の作業学習が組み込まれている。しかし、近年の就職難や雇用の減少、授産施設などの満杯状態により、卒業後の生徒の進路が困難な状況にある。学校としては自分の出来ることは自分でおこなう「自立」の意欲、社会との関連の中で本人が喜びを感じられる生活習慣などを育むことを目標とした教育活動を心掛けている。

◇書写指導の動機・概要◇

本校高等部のカリキュラムでは、月曜日から金曜日の2限時に課題学習という時間が50分設定されている。内容としては、生徒個々の卒業後の生活を考慮してより豊かに、充実した、社会との関わりの中で生活できるための力を養うことが目標とした学習活動がめざされている。

昨年度、養護学校という全く体験の無い職場への勤務となった私には、この時間に何をどう教えていいものか大変悩まされることとなった。私が受け持つ生徒は、自閉症の生徒たちであり、本を読むことができても全くその内容、光景を頭に描くことはできない生徒。文字を読むことすらできない生徒たちであり、質問をしてもオーム返しで言葉を繰り返すだけで、ともするとパニック状態におちいり手を噛んだり、頭を叩いたり、叫び声をあげたりで、普通学校で行っているような系統的な学習方法は全く効果をあげることはできないことを教えられた。

そういった中で、自分の名前や住所を書いたり、短い文章を書き写すという作業は小学部・中学部を通して体験してきているので、彼らにとっては見通しのきいた学習であり、落ち着いて何枚も書き写すことができることに気付いた。まず彼らが落ち着いて机に向かって学習できる状態を作ることが先決との思いで、平仮名で書いていた名前を漢字で、書けなかった住所を何度も書いて覚え込ませる。家族の名前や先生の名前、季節や行事などといったものを題材にして書くことを主とした学習をやるようになった。普通ならあきてきそうに思えるような枚数を集中して時間一杯頑張っ続けて続けた。

本校では、3学期の始業時に書き初めをすることが慣例となっているが、ここで彼らが筆というものの鉛筆にはない書きごちに新鮮な興味を示していると私は感じ、3学期の学習には筆ペンを取り入れることにした。鉛筆とは違い、筆の「入れ方」「止め方」「はね方」「払い方」等の要素が入ってきて、字を覚えるよりも私も彼らもそちらの方に興味を持ち出したように思える。

そして2年目の課題学習も同じ生徒を受け持つこととなり、残り2年間で卒業する彼らに何を学習させることが最良の方法か悩んだ。まず優先したのは、彼らが自由時間に行うことができる趣味（問題行動に思われなような）を持たせてあげたいということだった。それで、昨年度より継続しての「書写」、それに「切り絵」や「折り紙」を使った作品作りを行うことにした。また社会性を養うための「お金の使い方」「時計の見方」などの実用的な学習を今年度の課題学習の中心に据えることとした。

養護学校では、生活単元学習という「教科・領域（道徳、特別活動、養護・訓練）を合わせた指導」の形態をとる学習がある。ここでは生徒個々の卒業後の社会生活を考慮して、彼らが実社会で対面せねばならないことがらを経験させ、自分のものとしてできるよう援助してあげるという生活力の育成が目指される。本校高等部では、一週間に3時間組まれており、各学年でだいたい学期に1回行われる校外学習——買い物の仕方、乗り物の乗り方、レジャー施設の利用の仕方などを実際に体験してみる——の予備学習や学校行事の計画・準備にあてられている。今年度2年生は1学期に5回の「余暇の過ごし方」という単元を行い、「折り紙」「紙細工（広告紙を利用してのコースターや写真立てづくり）」「書道」「切り絵」の四つから一つ生徒に選択させ実施した。この単元を計画した理由としては、高等部のカリキュラムは作業学習で12時間もあり、負担を感じている生徒もいないわけではなく、学校行事も次々と組み込まれてくるので、少々慌ただしいものがある。そのため「ゆとりを持って、遊びながら」という学習時間が失われているように感じられたことや、自閉症でない生徒でもその余暇の過ごし方の多くは、テレビを見る、音楽を聞く、ファミコンをするなどの受動的な内容のものであるので、自分の手を動か

し創造しながら作品を製作するという内容のものをさせてみたいという思いがあったからである。

「書道」に関しては、書道を自ら趣味・特技として行っている清水先生に依頼した。

なかなか学校教育の中で余暇の過ごし方を学習するという考え方は、一般に理解されにくいかもしれない。だが実際に、本校の卒業生が就職した後にかかえる問題は、仕事自体のことよりも、仕事を終えてからの自由時間や土日の休日の過ごし方がうまくできずに引き起こされる場合が少なくない。職場でのストレスを癒すべく余暇が、逆にストレスをつものらせてしまっているからだ。そしてこうした問題は、卒業後にかぎらず、生徒の半数が寄宿舍で生活を送っている現状の本校においては、真剣に取り組まねばならない問題だと思える。

本校寄宿舍の舎生の自由時間の過ごし方

		小学部	中学部	高等部	全体
a	ぼんやりしている	28%	22%	24%	24%
b	独り遊び	27%	27%	31%	29%
c	傍観者的行為	18%	4%	7%	8%
d	平行遊び	18%	13%	14%	14%
e	連合遊び	9%	17%	17%	16%
f	共同遊び	0%	17%	7%	9%

- a. ぼんやりしている……目をひくものがなければぶらぶらしたりぼんやりしている。
- b. 独り遊び……他の子どもには無関係で一人で遊ぶ。
- c. 傍観者的行為……他の子どもの遊びを傍観しているが、ときどき口を出すことがある。
- d. 平行遊び……一人だけの独立の遊びであるが、他の子どものかたわらで遊んでいる。
- e. 連合遊び……他の子どもと一緒に遊ぶ。みな同じようなことをしているが、組織はない。
- f. 共同遊び……一つのことをするために、組織をつくって遊ぶ。リーダーがおり、役割分担もできている。

2. 生活単元学習における書道の実践

担当：清水 徳典

(1) はじめに

今年度「生活単元学習」で「書道」を担当する機会に恵まれた。毛筆の力においては個人差が著しい。そこで一人一人の能力に応じた授業をするためにはどうすればよいかを考えてみた。

①基本的な力をつける。

②その時間のねらいを持つ。

③授業での変化に柔軟に対応する。（興味と意欲に応じて）

これら以外には、書くことが楽しいと言えるように留意して指導にあたっている。

(2) 対象児の実態

A君………精神発達遅滞 自閉的傾向

手をたたいたり、独り言をつぶやいたり飛び跳ねたりと落ち着きがない。左手を噛みつく行為がある。書写に対しては手本を見て忠実に書こうと努力している。

B君………精神発達遅滞 自閉的傾向

自分のイボをいじったり、棒きれでリズムを打ったりハサミで紙を切ったり、カナズチに興味を示す。書写に対して視写は早くできるが写し書き程度で雑である。

C君………精神発達遅滞

自分の意志を伝達することはできるが、こちらからの質問に対して早とちりすることがある。書写に対しては形を見て写し書きをする程度である。

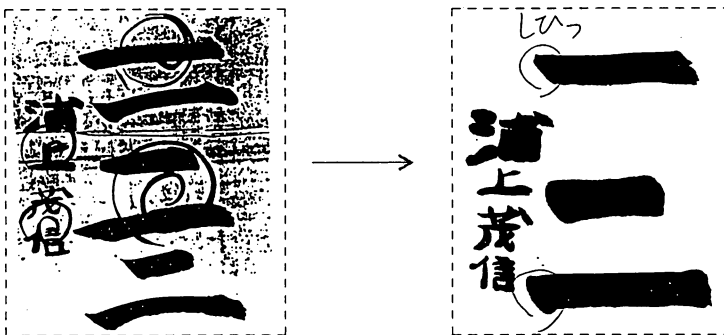
D君………精神発達遅滞 自閉的傾向

返事は元気だが、質問に対してはトンチンカンな解答が返ってくる。思い出すが遅い。書写に対しては初めてなので名前から書く程度。

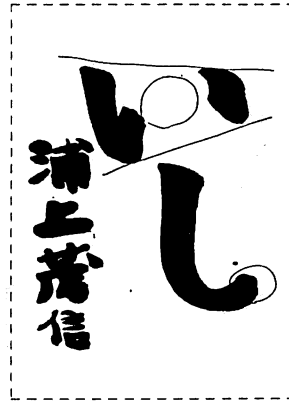
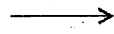
E君………精神発達遅滞 身体障害あり

自分で思っていることは話せるのですが、他人の話や聞こうとしない。書写に対しては初めてなので名前から書く程度。

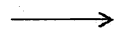
(3) 実践



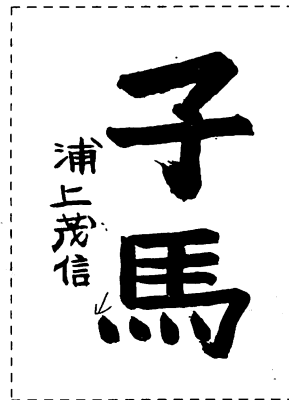
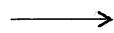
名前は上手に書けています。筆使いを注意しました。中心も考えて書こう。右のように上手になりました。（始筆）よくを言うと右上がりになればと思いました。



手本をよく見て書くようになりました。とくに「い」のバランスがすばらしい。「し」は下にながすように。



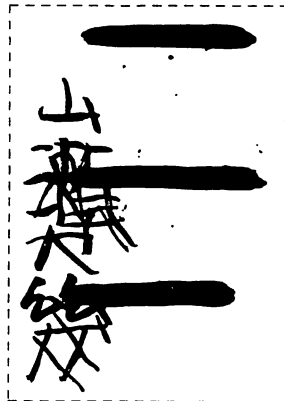
「三七」とバランスがよくなりました。筆を立てて書くことを繰り返し言った。



中心だけにとらわれていた。「馬」の点は、←の方向に書けたら。



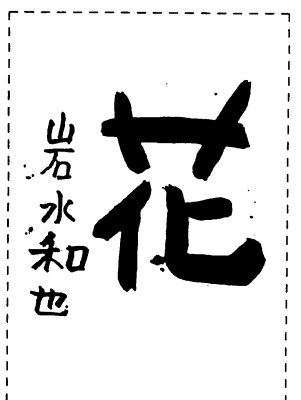
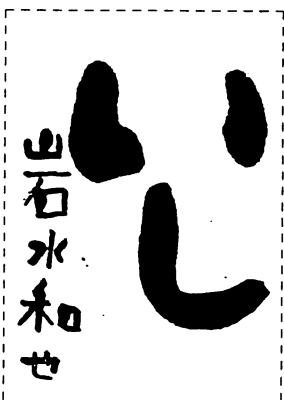
「麦」は手本を与えず、「本」を見て書かせました。○印の終筆の練習をすれば、さらに進歩するのではないかと思いました。

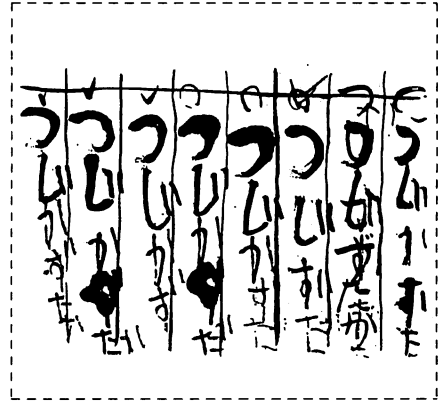
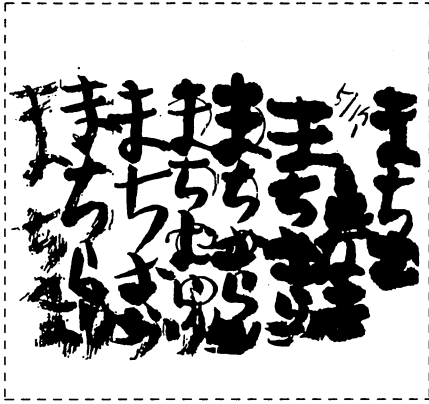


この生徒は手本を与えるとすぐ、書きはじめて一字ごとに墨をつけて書くところがあります。回数を重ねることに伸び伸びと書き、墨のつけ方が変化してきました。

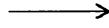
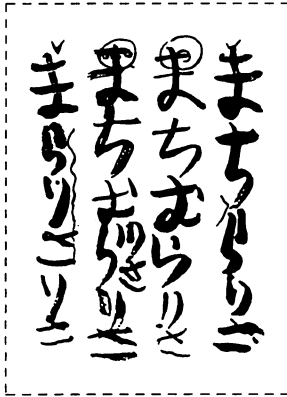


三枚見てみると、「名前」がすばらしくなった。技術的には始筆の指導をしてみたい。

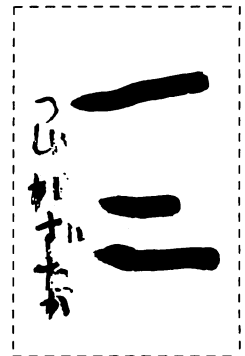
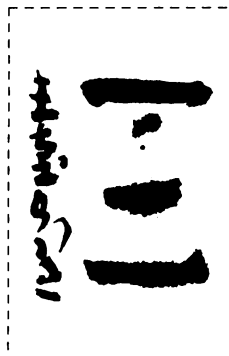
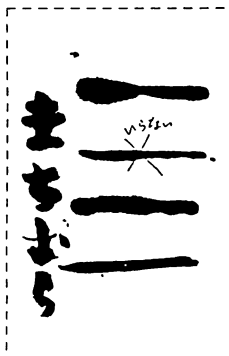




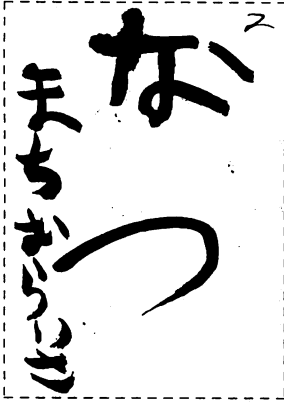
はじめてなので八行に名前を書いてもらいました。まっすぐ書くことがねらいです。



次は「たて」4行に名前を書く練習をしました。



おもいきり「一、二」を書いてもらいました。中心を考えて、名前もたいへん上手に書きました。



伸び伸びと自由に書けていると思います。

(4) 学習効果

- ・手本の文字は生徒が見てわかるものを選んできましたが、よく手本を見て書けるようになりました。中には私たちが書けそうもない線質があり、うらやましく思うこともありました。
- ・後片付けの方も最初は床にこぼしたりしていたので、バケツを用意して捨てるように工夫をしました。きちっと出来るようになりました。筆の方は水道できれいに洗ってきます。
- ・授業の最初、集中力をつけるために黙想を取り入れてたことがよかったと思っています。
- ・生徒達はよろこんで授業に参加するようになりました。

(5) 終わりに

私たちの発表は、まだ指導をはじめて間もないほんのわずかの実践にすぎませんが、行ってよかったなあとと思っています。生徒が、紙の大きさ・字の大小を考え、墨のつけ方も工夫して書けるようになったこと、落ち着いて書けるようになったこと、どれもたいへんうれしく思うものばかりです。他の生徒達にも楽しく伸び伸びと書道に取り組めるように、工夫を続けていくことを今後の課題としていきたいと思っています。

3. 課題学習における書写指導

担当：高橋 昭夫

(1) 対象児の実態（障害の程度と書写に関する実態）

○U 君 —— 高等部2年（16才）、精神発達遅滞・自閉的傾向

他人への要求は「○○（を）～してください」という形で言うこともあるが、単語での要求が多い。

自由時間は何をすればいいのか見通しがつかなくなり、手を叩いたり、独り言をつぶやいたり、飛び跳ねたりと落ち着きがなくなる。多動的傾向あり。

きつく叱られたり要求が通らなかつたりすると、自分の左手の甲を噛みつく自傷行為があり、噛み跡がタコになっている。

書写に対する実態……かなり中学部より勉強してきており、かなりのレベルの漢字（小学校の2・3年生レベル）を読んだり書いたりすることができる。また新しい漢字の習得などは熱心に学習する。ただ、自分の今日あった出来事や感想文などといった文章を書く能力はない。字は、鉛筆の持ち方がしっかりしておらず指先にあまり力がないので、キチキチとした字は書けず、ともするとつづけ字になる。字体は四角ばった感じである。毛筆での字の練習は正月の書き初めぐらいであった。

○Y 君 —— 高等部2年（16才）、精神発達遅滞・自閉的傾向

他人への要求は単語でしか言えない。

自由時間は床の上にゴロンとあぐらをかき、グターしていることが多い。だが自分のイボをいじったり、指をこすりあわせたり、棒で単純なトントンのリズムを打つなどしている。

ものごとに対するコダワリが強く、カレンダーや棒きれやカナヅチなどには強い興味を示す。また、パターン化された日課の中では落ち着いて過ごせるが、違った状況の中におかれると軽いパニックを起こす。

書写に対する実態……字は一種の記号でしかなく、ひらがな47文字を書けるが、何かを見て、その名称は答えることができても書けるものは少ない。高等部に入ってから練習で名前、住所などは漢字で書くことができるようになった。字を書くときにはふるえるほどに指先に力が入ってしまい、字に柔らかさや丸みがなくいわゆる金釘様の字体である。文章にして感想を書いたりという能力がないので、字を書くことに強い関心を持っていない。毛筆での字の練習は正月の書き初めぐらいであった。

自閉症児の一般的特徴

- ・ 認知機能の障害 —— 認知機能とは、生活や学習の環境における多様な刺激や情報を受容・整理し、過去の経験や記憶と照合し、言語や思考系の機能と統合して、適応行動を作り出すための脳内の情報処理過程を意味している。

例えば、人の声や物の音がしたとき、単に「聞こえるか、聞こえないか」ということだけの機能を問題にすれば、それは感覚のレベルにあるといえる。しかし、聴力的に受容された音や声が、「何の音か、だれの声か、何を意味するものか」が分かったとすれば、それは未分化な感覚の領域を越えて、知覚とか認知の機能領域に達したことになる。しかし障害が重症であったり、低年齢で発達が未分化な状態にある自閉症児では、種々の程度に環境の意味が理解できず、したがって自分という主体がはっきりしない曖昧模糊とした、何とも寄る辺のない不安定な状態にあるのであろう。

認知機能は、聴覚・味覚・触覚など、あらゆる感覚の領域にわたって働いているもので、自閉症児は、種々の感覚領域にわたって、さまざまな程度に障害や欠陥を持って苦悩している。

このように自閉症児の持つ困難は、環境が送ってくる情報の処理能力の障害に由来するところが大きい。すなわち、理解や思考、さらに、適応行動を計画し、実行するまでの過程の混乱に苦悩していると言いかえることもできる。自閉症児は、まず、見るもの・聞くものの意味が種々の程度に理解できないので、いつも一人ひとり種々の程度に混乱しているか、きわめて不確実な、不安な状態にいる。

- ・ 情緒・社会性の障害 —— 相手が何をどう感じているのかという気持ちや感情はまったく理解できず、式典や特別な行事の場面はもとより、日常生活の種々の環境や状況で、そこにいる人々が承知し合っている暗黙の了解事項や、自分に何が期待されているのか、あるいはどんな行為は不適切なのかといったような社会的意味を読み取ることができない。（自閉性障害を伴わない発達障害児では、低い認知能力でありながら、一定の社会的・情緒的機能をみせるケースは決して珍しいことではない）
- ・ 一つに焦点化される関心 —— 関心が一つのことには向かないという特性は、自閉症児のコミュニケーションや会話をひどく困難にしている。コミュニケーションは、自分の考えと相手の考えというように、少なくとも二つ以上のことが同時に進行

することになるので、複数のことに同時に関心の焦点が合うようにならなければ成立しないことになる。自閉症児のことばが、しばしば、長い年月にわたって自分のほうからの一方的な要求語ばかりで、容易に対話に発展しないのは、相手のことばの意味を理解する能力に欠けることもあるが、それと同時に、ほかのタイプの発達障害に比べて、一つのことばにのみ関心を集中させるという特性によることも大きい。

同じような理由で、自閉症児は、話や本のストーリーを追うことができない。過去の話と現在の話とを、同時に関連づけて考えることができない。関係の概念が成立しないといわれる特性であり、欠陥である。自閉症児は多くの場合、前後関係とは無関係に、その場その瞬間を生きているという傾向が強い。だから長い話を聞いたり、以前の事柄との関係で左右される次のことを考えたり理解することはひどく困難である。

- ・概念化が困難で、細部にこだわる —— 自閉症児は一般に、全体概念が見えないうえに、最優先事項なども理解できず、問題や場面の細部にこだわる傾向が強い。具体的には、教室で何をやるかということよりも、机やいすの並び方が気になり、窓を閉めることに強い関心やこだわりを示したりする。また曖昧なところのない事実には関心が向かないということも、自閉症児の顕著な特性である。だから、ジグソーパズルのように、各切片の位置が厳密に決められているものならばよくできるが、福笑いになると目、口、鼻、耳などの切片の置き場所が厳密に特定されていないので、目隠しをしないでいても、とても困難になるか、まったくできなくなってしまう。

細部へのこだわりや、定型化した問題への関心という特性のために、彼らはしばしば相手にした人にはとてかまわずに、生年月日・年齢・出身地・職業などを問いただすというようなことをしてしまうことがある。

◇自閉症生徒への余暇指導の意義◇

自閉症の青年期・成人期の人たちにおいて、家庭と地域社会を生活基盤にして安定した適応状態を示している人達の多くは、まず、①家庭内で、家事などの役割を習慣的に分担して実践しているということ、次いで、②自分ひとりでも、打ち込んで過ごすことのできる余暇活動を身につけているということ、この二点に、共通した生活習慣を持っているということである。

私達、一般の人々にもこれは当てはまるものだと思う。職場において、家庭において自分の果たす仕事や役割がないならば、自分の置くべき所を失ってしまうだろう。また自由時間を楽しめる趣味を持たないならば、毎日の生活は味気ないものに

なってしまうだろう。そして私達は独学で趣味の分野を広げていけるが、自閉症の人達にはそれは大変な困難をともなうものであり、養護学校では一人々の特性を考慮して育てあげねばならない分野なのである。

自閉症児は（大人になった人の大多数も）、遊びや娯楽の内容のレパートリーを自分で発展させていくことがめったにない。彼らの多くは、自由時間よりも、ワーク・システムに従って身につけた、習慣的で定型的な作業をしているときのほうが生き生きしており、喜びや楽しみを感じているようにさえ見える。おそらくそうなのであろう。できないことを見よう見まねで、意欲的に、多少でも冒険的にやってみようとするのは、まずない。そういうことには臆病で警戒心がきわめて大きい人が多い。

自閉症児の不応行動は、しばしば自由時間という放置されている時間に発生し、自由時間に固着する。おそらく彼らにとって、自由時間の多くは、何を、いつまでしていればよいか分からない、不安と混乱の時間なのであろう。彼らに余暇指導を積極的に指導することの意義は、こういう彼らの特性にもよるところが大きいのである。習慣や日課のようになった技能を身につけることで、多くの人はやっと安定した日常生活を送ることができるのだと思う。

このように、自閉症児がレジャーの技能を習得すると、それだけ情緒的に安定して過ごすことができる時間を多く持つことになる。そのことは、彼らの日常生活を、安らぎのあるものにして、それだけ楽しく豊かにする。そしてそれらのものを、しだいに社会的な活動に発展させていけるということになれば生活空間を広げて、生活内容も豊富にすることができるわけで、自閉症の人たちの人生を計画的に援助するうえで、余暇活動の教育的指導の価値はきわめて大きいことになる。

※自閉症児の不応（問題）行動については表を参考にしてください。

行動障害の実数と頻度

行動障害の 種類	脳 感 染 12人		出産時障害 11人		そ の 他 後天性障害 9人		自閉性障害 12人		自閉を除く 生まれ原因 不明群(*1) 49人		ダウン症 9人		その他生来 性障害(*2) 12人		計 114人
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	
興奮	8	66.7	8	72.7	6	66.7	8	66.7	20	40.8	1	11.1	3	25.0	54
暴行	2	16.7	1	9.1	3	33.3	7	58.3	16	32.7	2	22.2	5	41.7	36
器物破壊	5	41.7	3	27.3			3	25.0	5	10.2			1	8.3	17
反抗					3	33.3	8	66.7	5	10.2			2	16.7	18
拒絶	4	33.3	5	45.5	6	66.7	10	83.3	15	30.6	2	22.2	5	41.7	47
多動	5	41.7			3	33.3	9	75.0	11	22.4			1	8.3	29
自傷	9	75.0	3	27.3	3	33.3	7	58.3	13	26.5	1	11.1	4	33.3	40
破衣	2	16.7			1	11.1	2	16.7	6	12.2					11
脱衣	1	8.3	2	18.2	3	33.3	6	50.0	12	24.5					24
衣類かみ	2	16.7	2	18.2	1	11.1	4	33.3	9	18.4					18
奇声	3	25.0	4	36.4	5	55.6	9	75.0	13	26.5			2	16.7	36
拒食			2	18.2	3	33.3	6	50.0	5	10.2					16
異食	1	8.3	4	36.4	2	22.2	6	50.0	10	20.4	1	11.1			24
反すう	2	16.7	1	9.1					3	6.1					6
爪かみ	1	8.3							2	4.1					3
指しゃぶり			1	9.1	9	100.0	1	8.3	6	12.2			2	16.7	19
髪ぬき	2	16.7					1	8.3	2	4.1					5
チック	1	8.3			2	22.2	1	8.3	4	8.2					8
性器いじり	5	41.7	3	27.3	8	88.9	8	66.7	17	34.7			4	33.3	45
自慰			3	27.3	5	55.6	5	41.7	10	20.4	1	11.1			24
便秘	2	16.7	1	9.1	3	33.3	4	33.3	11	22.4	1	11.1			22
放尿	3	25.0	3	27.3			7	58.3	16	32.7					29
収集癖	3	25.0	1	9.1			7	58.3	5	10.2			2	16.7	18
執着	5	41.7	3	27.3	3	33.3	12	100.0	15	30.6	1	11.1	3	25.0	42
常同行為	4	33.0	5	45.5	6	66.7	10	83.3	15	30.6	2	22.2	1	8.3	43
脱走	2	16.7	2	18.2			3	25.0	5	10.2					12
無断外出	1	8.3	2	18.2	1	11.1	7	58.3	7	14.3					18
徘徊	5	41.7	5	45.5	3	33.3	12	100.0	17	34.7					42
衝動							3	25.0	3	6.1					6
強迫行為			2	18.2	2	22.2	1	8.3							5
反響症状			1	9.1			1	8.3	1	2.0					3
一人当たり	6.5		6.1		9.0		14.0		5.7		1.3		2.9		6.3

▲表注

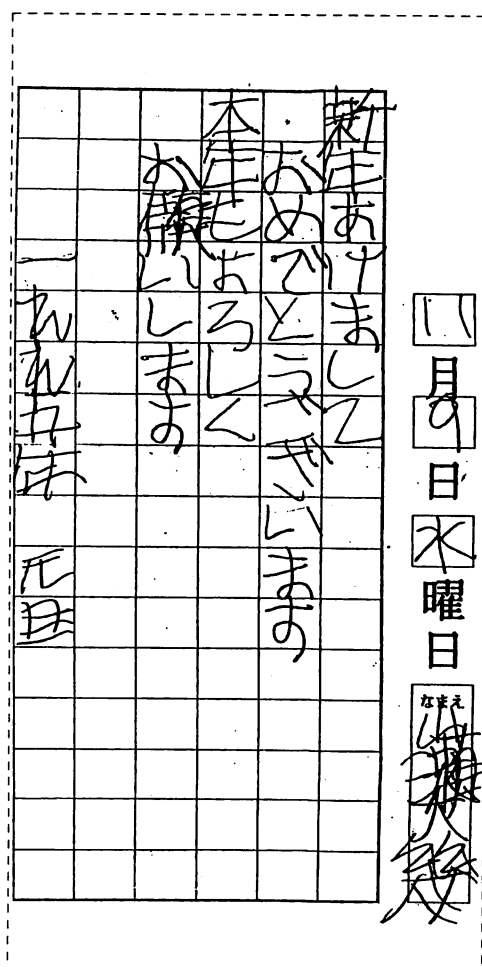
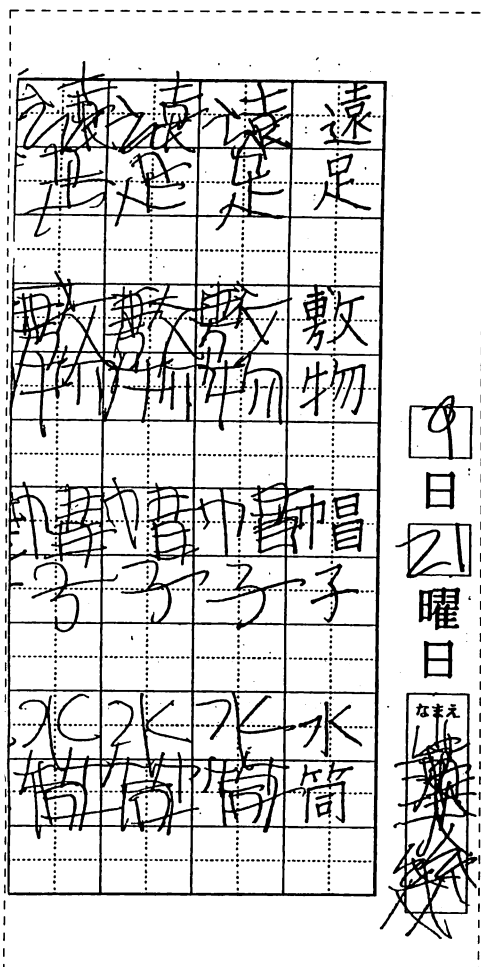
(*1) 原因・症候群名・疾病名などの不明な群

(*2) 原因・症候群名・疾病名などの判明している群
(結節硬化症、クレチン病、ハーラー病、胎生
期放射線障害、マルファン症候群など)

(2) 実践の内容

① 硬筆による書写指導

「実際、彼らが社会の中でどれくらい文字を書く機会があるだろうか」という疑問をもつ人もいないではない。それでも、学習して書ける文字が増えていくことに確かに喜びをもっている。また、年賀状のやりとりなどは格別な楽しみをもったものなので、簡単な文面や識別できる丁寧な字が書けることは必要なことであると思う。そのため指導の重点は、識別できる丁寧な字が書けるようになることにおき、なぞりによる練習をかなり行った。また、水性ペンなどで書くと、力が入り過ぎるため、すぐにペン先がつぶれてしまうので、鉛筆やボールペン以外のものでもスムーズに書ける練習も行った。



順	新	美	歌	文
番	聞	術	声	集

新	参	姿	中	発
聞	加	勢	庭	表

2月1日 水曜日 山瀬

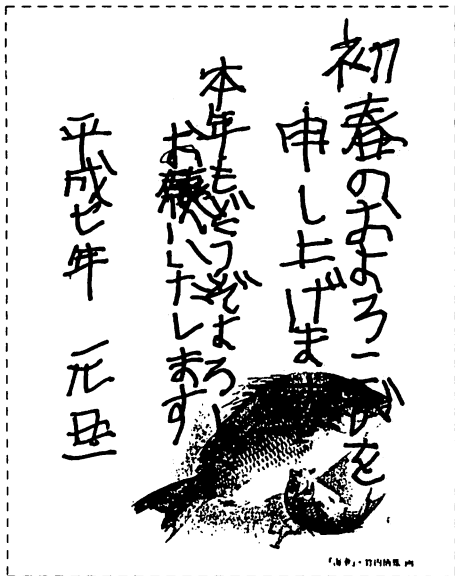
赤鉛筆で下書きしたものを筆ペンでなぞらせてみた。筆ペンを使うようになって鉛筆やチョークで書く字が柔らかくなってきた。

順	新	美	歌	文
番	聞	術	声	集

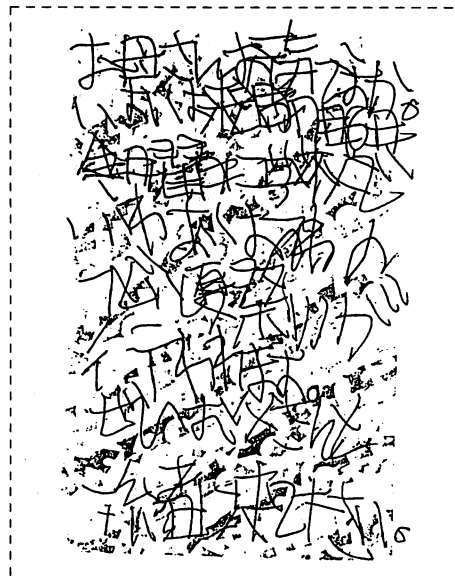
新	参	姿	中	発
聞	加	勢	庭	表

2月1日 水曜日 山瀬

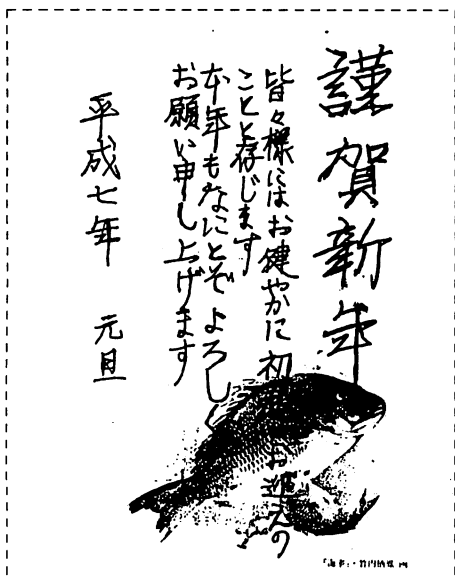
手本を見て、自分で書かせてみた。細い線で書けるようになった。右払いに今までにない工夫が見られる。



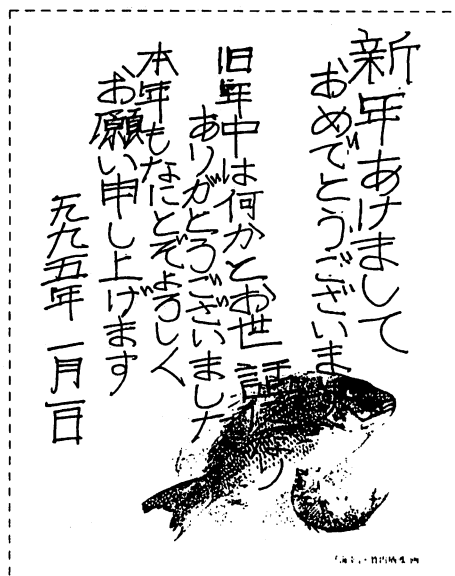
Y 君……二学期末に年賀状を書く練習をしたもの。一学期の案内状と比べると格段の進歩がある。



Y 君……「すみれの集い」の案内状をお母さんに宛てて書いたもの。文面は「お母さんお元気ですか。いよいよ来週7月6日金曜日に学校で、ふれあいすみれのつどい「夏祭り」が行われます。ぜひ、お父さんと一緒にきて下さい。」と書かれています。



U 君……私が行書で下書きしたものをなぞらせてみたもの。字をよく知っているので、間違えることなくうまく書けている。時間をかけて教えれば、行書までなら覚えられないのではないか。



U 君……多少文字に大小があるものの、丁寧に書けている。硬筆の字にもう少し柔らかい字が書けるようになればいいことなし。

②毛筆による書写指導

毛筆での書写は芸術としての一面もあるので、基本的な筆使いは指導したいが、それぞれの個性ある字体をうまい具合にいかせたものにしたという思いがあり、なぞりによる練習は避け、伸び伸びと書かせることにした。

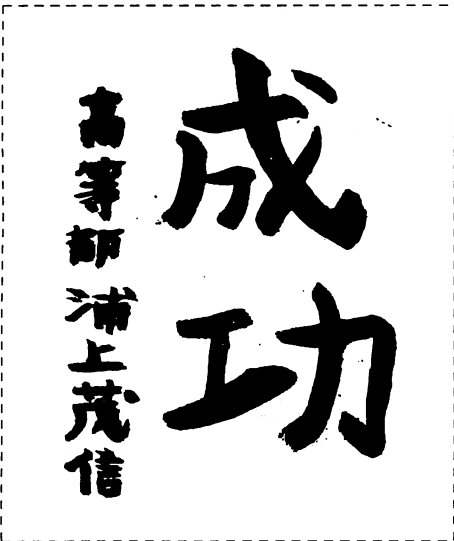


5月15日(月)

課題学習で初めて書写を行う。筆を立てて持つことやどういうタイミングで墨をつければよいのかの指導に終始する。紙に二つの文字をバランスよく入れることが困難。しかし、起筆は力強く、整っている。

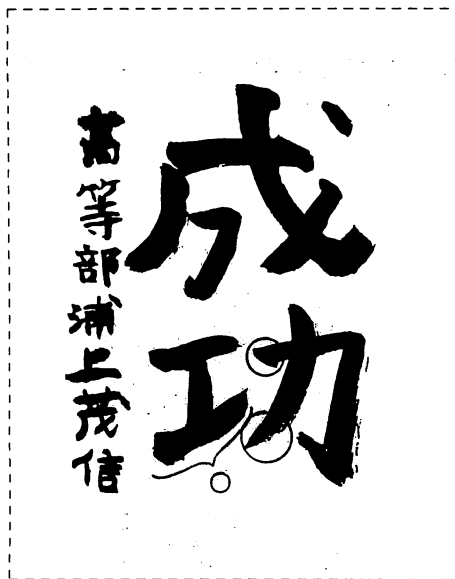
5月15日(月)

紙に折り目を入れたところ、比較的バランスよく書くようになった。「風」の構えの形が非常に良くでている。



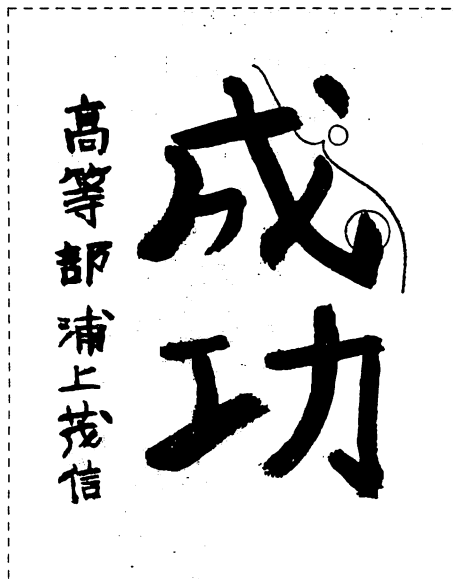
6月20日(火)

筆を立てて書くことを繰り返し言い聞かせたため、「成」の4画目の入れ方、はね方がうまくなった。しかし点の打ち方がまだ軽率。



7月10日(月)

「功」が非常にうまく書けた。今まできれいにできなかった左払いを、「もう少し速く切る。」筆の入れ方、止め方にメリハリがある。



7月10日(月)

手本を近づけてジーンと観察しながら書いている。「成」の形が非常にバランスが良い。特に4画目の部分がきれいにできている。点の打ち方も時折気遣いが見られる。名前も細筆の使い方がうまくなり、にじむほど墨をつけることがなくなった。



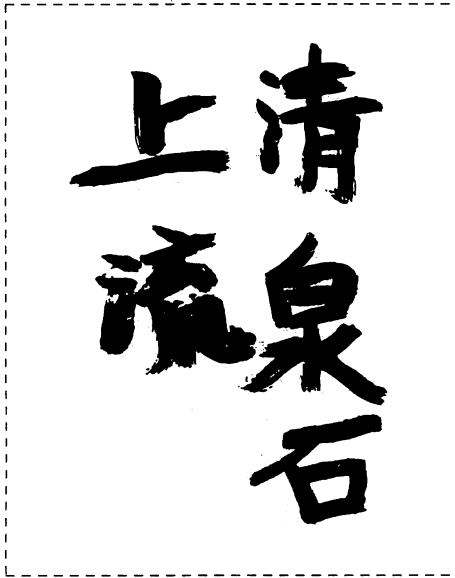
7月17日(月)

右払いの字を書いて練習させてみる。右払いがうまくいかず、少々いらだって雑になっている。しかし、起筆は筆をたててきれいに入れている。



7月17日(月)

筆入れは力強いが、止めに弱さがあつた彼に少し止めの力強さができた。しかし、右払いがなかなかできない。いったん止めるようなスピードで押さえてから力を抜きながら引っ張ってくるという感覚が難しい。止めるだけとなってしまう。



夏休み中の宿題より 初めて6文字のハ'ランスを取り入れてみたが、非常にうまくハ'ランスをとっている。書き方は雑であるが、逆に墨のかすれ具合が面白い。



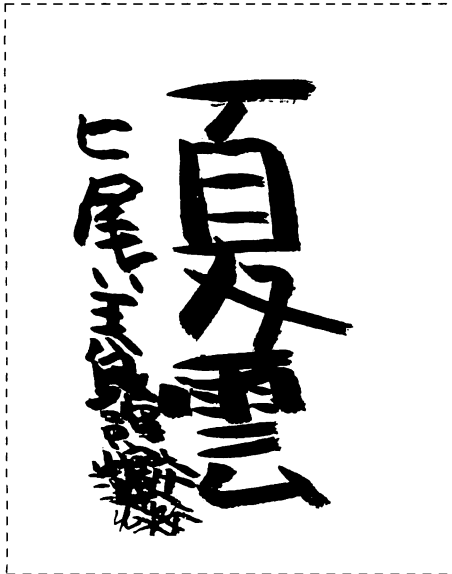
9月8日(金)

夏休み明け最初の書写。期間があいたせいか起筆まで雑になっている。筆先が開いたままで書いているので、入りの部分に割れた部分が見られる。「遠」のつくりの大きさの具合が難しく、全体のハ'ランスを崩している。



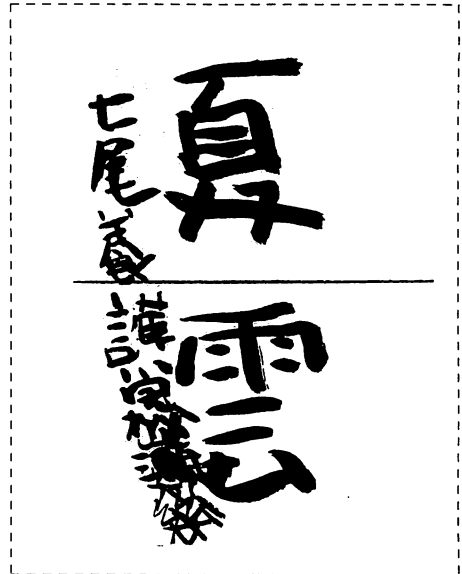
9月8日(金)

ハ'ランスをうまくとらせるために折り目を入れてみた。少し「遠」が小さくなり、ハ'ランスがとれた。



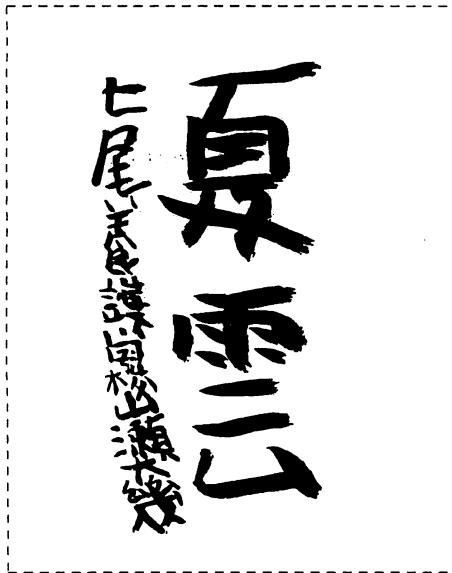
5月15日(月)

課題学習で初めて書写を行う。筆を立てて持つことやどういうタイミングで墨をつければよいのかの指導に終始する。姿勢が悪いので何度も注意する。2文字を縦にバランスよく入れるのが困難。筆を寝かせて書くため、きれいな線が出ない。名前書きの大きさがつかめず尻つまりに、また右の方へ曲がってしまうくせがある。



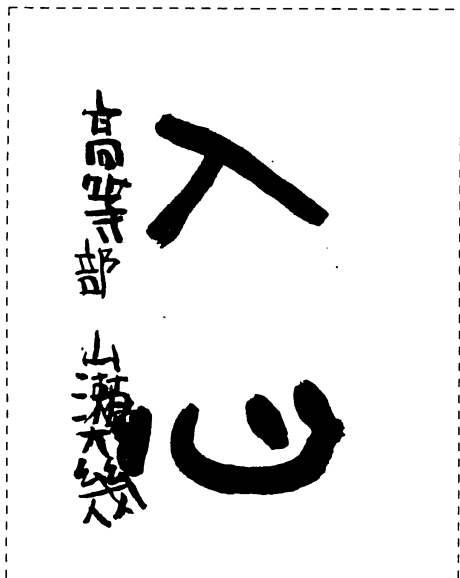
5月15日(月)

真ん中に折り目を入れてみると、うまくバランスがとれるようになった。少し小筆の墨つけが慣れてきたが、右曲がりのクセがぬけない。



5月15日(月)

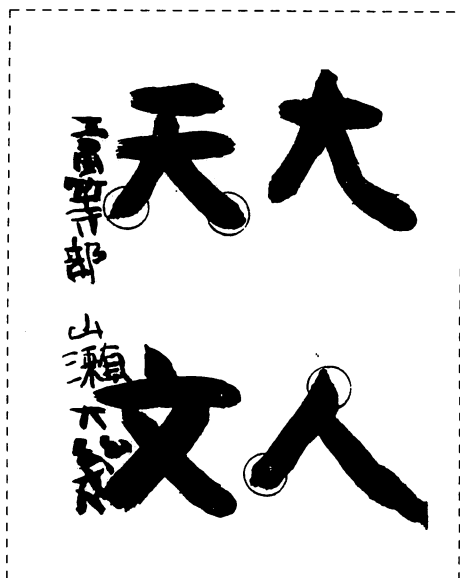
名前の部分の真ん中に縦の折り目を入れて、まっすぐに書く練習を何枚か行ったためかなりなおった。また尻つまりもなおりはじめた。



6月20日(火)

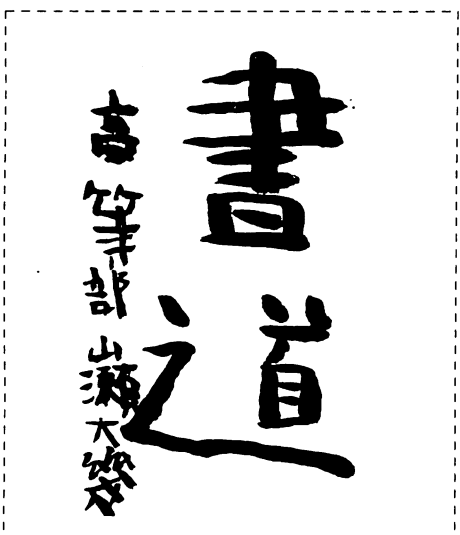
「心」の形に面白味があり、うま味はないが味がある。

名前書きがだいぶうまくなった。



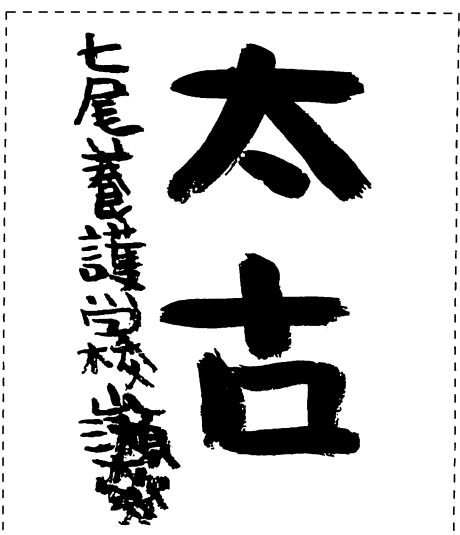
7月12日(水)

はじめて4文字をやらせてみたが、うまくおさめている。彼独特の筆入れ、はね、はらいが面白味のある字体を作りはじめている



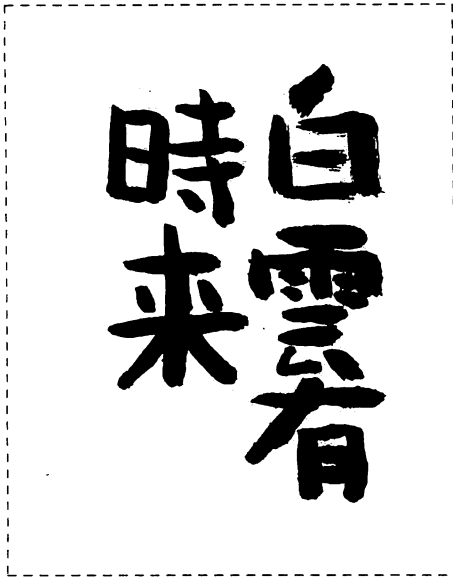
7月17日(月)

本校の生徒は、しんじようを上手く見て書くことが非常に困難である。またつくりをハランスよくおさめることが難しい。名前書きが真っ直ぐに書けるようになり、丁寧さが見受けられる。



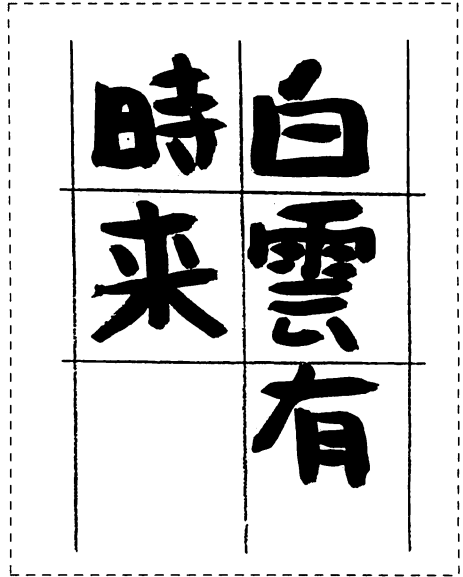
夏休み中の宿題より

たくさん枚数をこなそうと、少々雑な字になってきている。しかし、筆の動かし方にだいぶ慣れてきたようである。



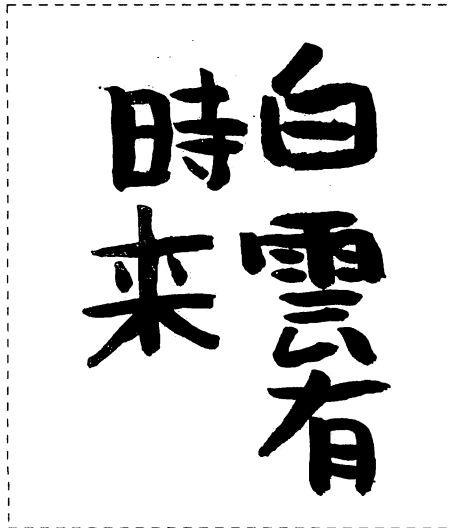
9月8日(金)

夏休み明け初めての書写。初めて6文字のハ'ランスで書かせてみる。思いのほか線のハ'ランスが整っている。しかし、横のハ'ランスが悪い。



9月8日(金)

折り目を入れてあげるとうまくハ'ランスがとれた。「有」「来」などの字は絶品。非常に味のある字である。



9月8日(金)

何枚か折り目をつけた紙で練習した後、折り目を入れず書かせてみた。最初よりもかなりバランスがとれている。

(3) 書写指導の学習効果

- ・ 普段の彼らの学習態度は、与えられた作業のノルマや課題のプリントを全部こなしてしまわないと気がすまないというような何かに追われるような切迫感でやるような学習態度で、決して一生懸命に頑張っているというものとは少々異なっている。書写の学習も最初の頃は、とにかく沢山書いて半紙をなくしてしまおうというのか、丁寧さに欠いた作品を大量に書き上げていた。しかし、回数を重ねるたびに1時間の学習時間で書きあげる枚数は減ってきている。これはノルマとして与えられているという学習から、一枚々の作品をしっかりと仕上げたいという意欲があらわれてきたものにとらえたい。
- ・ 翌日の当番の生徒に、黒板に名前をいれてもらう場所があるのだが、見違えるように読みやすい字を落ち着いて丁寧に書き入れるようになった。これは、毛筆での練習により、今までであった力みぐせが取れたことの影響が大であると思える。
- ・ 硬筆の学習においては時折学習に乗り気でなく、窓の外をながめていて何度か学習を促すような声かけをしてやらねばならないことがあったが、毛筆での学習においては一度もそういった場面がなく、筆で書き上げることの難しさ、楽しさというものを彼らが多少なりとも感じてくれているものと思う。
- ・ 私達の書写は手本とすべき先達の作品を何度も書き写す、いわゆる模写であるが、どんなに手本に近い字を書き上げても、その字は面白味という点では欠ける部分を強く感じてしまう。しかし、彼らの書き上げる作品は多少なりとも手本を意識するが、認知の仕方が少し異なるのか、彼ら独特の文字の形というものが強く浮き出し、私達には書けないような線や文字の形を書き上げ、手本には忠実ではないが非常に面白味がある。そういった才能を羨ましく思うこともある。

(4) 今後の課題

卒業までもう残り一年半という残りわずかな学習期間しかない中においては、金銭に関する知識や買い物の仕方、時計の見方や時間に関する知識などの学習は優先して行わねばならない分野である。一週間に5時間しかとれない課題学習——本校は行事が多く、またその練習や準備期間として大幅に課題学習はカットされてしまう。その上、高等部では2、3年生には現場実習という卒業後に予定されている進路先で実際に職場体験するという期間がもうけられており、2年生は後期に1回、3年生は前期、後期の2回、それぞれ2週間の実習を行っている——において、そう何度も書写の時間を設けることが難しいという面がある。これを解決するためには、彼らが寄宿舎や家庭において、寮母先生や保護者の方に理解を得て書写を行うことができるまでに指導してゆかなければならない。しかしそのために乗り切らねばならない課題が山とある。少し挙げてみると、

- ①稽古し終わった後のかたづけ —— 筆の洗い方や硯に残った墨の捨て方、さらには書き上げた作品をどうするか等 —— の問題。指導はしているが、まだまだ一人ではおぼつかない。
- ②常についていて声かけしてあげねば、左手の押さえや体全体の姿勢、さらには筆への墨付け、筆を立てて書くことなどがおろそかになってしまう。
- ③どういう字を手本として選ぶか。
- ④書写を行うと、たびたび机や床に墨をこぼしてしまうことや、指についた墨を衣服で拭ってしまう —— 衣服についた墨は普通の洗濯ではなかなか落ちない —— などするので、墨をこぼしたり衣服につかないように配慮することも教えねばならない。

こうした問題を解決せねば、書写活動が彼らの自由時間においてなされるようにはならないだろう。

もう一つ大きな問題としては、彼らが手本としている字に対して、彼らその意味を理解していないという点である。これは指導する側の説明のまずさもあるが、実際に言葉で説明しても彼らがそれを理解させることは困難であるという面もある。だから、「夏雲」という作品を書くならば、写真や絵を見せた上で書かせるというまでの準備や配慮が必要となる。そういった意味で手本の題材としては、彼らの身近にあるもので彼らが理解しているものを選択してあげねばならない。そこまで考慮して初めて、養護学校においての書写の授業が成り立つものとする。

研 究 誌 上 発 表

ワクワク ドキドキ 初めての毛筆

津幡町立中条小学校 教諭 北野 京子

1. はじめに

級外で、書写を中心を持たせていただくことになった。いろいろな学年に出て、それぞれの段階の子どもたちに接し、成長のあとも見ることができた。その中で、自分自身初めて受け持つことになった三年生の書写は、毎回ドキドキワクワクの連続であった。塾に通っている数名の子をのぞけば、ほとんどは、筆で文字を書いたことなどない三年生。ぴかぴかの習字セットを持って、皆、意欲満々の顔をしている。この顔の輝きを失わせないようにしたいと思いながら取り組んだが、失敗や反省の連続であった。数々の失敗を交えながら、一学期のつたない実践について述べてみたいと思う。

2. 実践より

(1) 用具を出す

まず、新しい習字セットからひとつひとつ用具を取り出して、名前の確認。筆は、みんな知っている。すずりを出して「これ何？」と聞くと「すみ入れ」という答え。三年生四クラスに出ているが、「すずり」という答えが出てこないクラスもあった。文鎮。二つあるのでカチカチたたいてみる子もいる。下じき。「このきれみしたいのが下じきか？」ひとつ出すごとに大さわぎ。のりでかたまった筆を手でやわらかくする時もあちこちでいろんな声があがる。真剣な表情で筆先と格闘しているかと思えば、やわらかくなった筆で手や顔をなでて、感触を楽しむ。はやく、この筆でじょうずに字が書きたいという気持ちでいっぱい。ぼく汁のふたをあけて、すずりにぼく汁を入れようなどと言おうものなら「ふた、あかん」「どれくらい入れればいいんですか」「おまえ入れすぎや」さわぎは更に大きくなる。これからの書写の時間、あたり前のこととなる“ぼく汁を入れる”という作業が、こんなにも感動に満ちたものだなんて、こちらの方が感動してしまった。

(2) 用具を並べる

何も言わないで見ていると、すずりの置く位置、向きはバラバラ。「すずりは、どっちに置けばいい？」と聞く。筆を右手に持たせて、どっちにすずりを置くと書きやすいか考えさせる。すずりの向きも、海の方を手前、りくの方をむこう側にする置き方が、何時間か重ねた後でもみられ、そのつど声をかけるようにした。

筆洗い用の水入れを各自用意させ、すずりの上側、机の右上におかせた。絵の具セットの水入れを兼用して用意している子もいたが、机のスペースがせまく、教科書を置く場所がなくなったりした。足でけてこぼさないよう一声そえて下に置かせたりしたが、別の子にこぼされて、床が水びたしになることもあった。もし、教室に習字用の水入れを置くスペースをとれるなら、各自ふたつきのジャムのビンを用意させ、水を入れてふたをしておけば、持ち運びの時、書いている時、こぼす心配もなくよいと思う。

書いた作品を乾燥させるため、新聞紙を洗たくばさみではさんだものを机の横にかけさせたが、新聞紙にきちんとはさんで、落ちないように洗たくばさみにはさむという作業が、三年生ではとても時間がかかった。床に新聞紙をひいて、並べさせる方法から、慣れてきたら、場所をとらないよう、机の横にかけける方法にかえていくのもよいかもかもしれない。

(3) 姿勢

教科書・指導書によると、書き易いすわり方は、①机と腹との間を少しあける。②背といすとの間をあける。③背筋を伸ばす。④足を少し開き、垂直に下ろす。書く時の手については、①鉛筆で書く時と違い、ひじや手首をあげて書く。②右手は手の平だけを机上にのせて、ひじはのせない。半紙の左下を押さえるのを基本とするが、必要に応じて動かし、文鎮の代役をさせる、とある。

四月、第一時間目にみんなで学習した後も、毎時、書く前に次の四つのことを確認した。

いすは？（ちゃんと引く）

足は？（床にしっかりつける）

背中は？（まっすぐのばす）

左手は？（もうひとつの文鎮。紙の上のにのせる）

確認しないままだと、いすは少し下げぎみで、足は机の下の横棒の上のにのせ、したがって、背は少し前かがみの姿勢になる子が見られた。また、左手の位置については、書きながら、ずらすということに、なかなか慣れなかったが、おれや右はらいなどで紙が筆にくっついてうまくいかない時をとらえて、声かけをくり返した。

(4) 墨汁のつけ方

書く時間を確保するため、毎回、墨汁を使用した。八割くらいおろした筆の半分を越えた所まで、たっぷり墨汁を含ませて、ポトポト落ちる分をすずりの端で落とすよう言いながらやってみせた。墨汁をつける量が足りないとかすれ、かすれた上からあわててぬり直す子。ポトポト墨汁がたれているまま書いて、紙をよごしたり、書いたあとに墨汁がたまって、たれたり、紙がやぶれたりして、大さわぎする子。それ

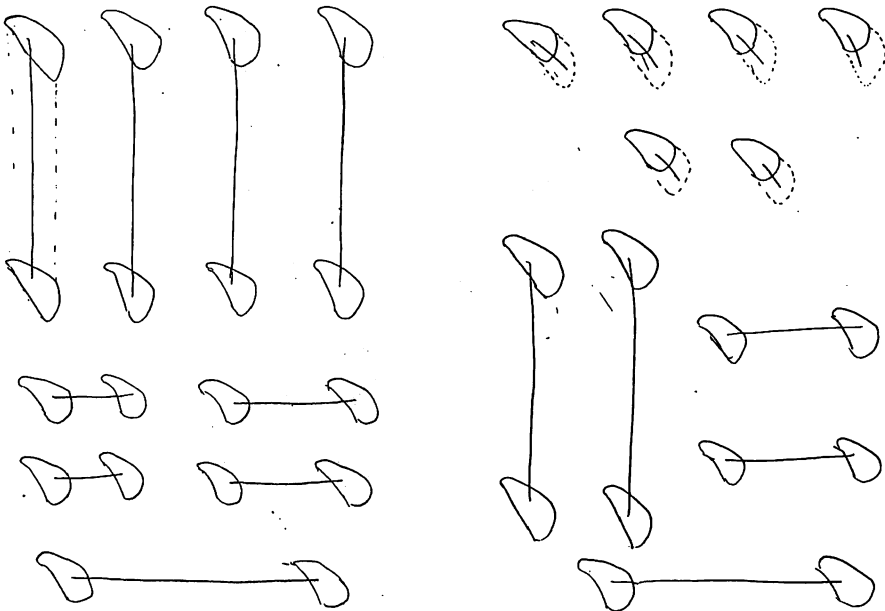
それ書きやすいすみの量を体で感じ、コツを飲みこむのに、何度も失敗を繰り返していった。また、書いている時に紙がやぶれるのは、書く時の力の入れ方も関係してくるので、個別に手を添えて書いたりした。

(5) 書き方 —— 10時半

始筆でも送筆でも終筆でも、筆先は必ずといってよいほど、時計の短針でいうと、10時半の方向を向く。水書板で師範する時、送筆の途中で止めて、10時半の方向を向いているかどうか確認させ、常に10時半を意識させるようにした。おれや右はらいの学習の時、筆全体にうすい墨、筆先に濃い墨をつけて、師範し、筆先の通る道を目で追ってみた。

(6) 練習用紙

次のような練習用紙を自作し、使用した。常に10時半を意識させるため、始筆、終筆、おれやはらいで一度止める所など、筆の向きをしるした。練習用紙の上に半紙をのせて、一、二枚なぞり、最後に練習用紙に書くというパターンが多かった。

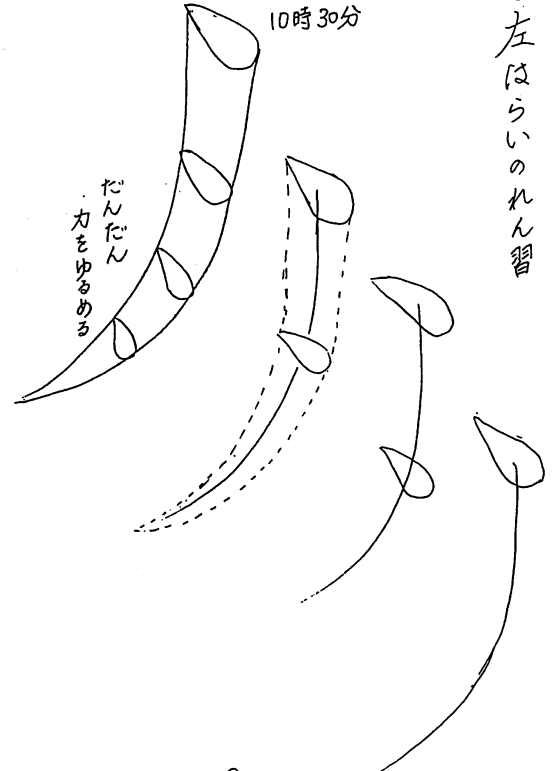
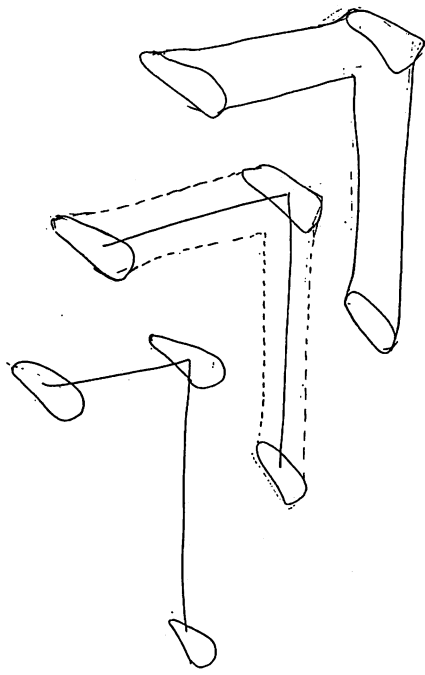


○左はらいのれん習

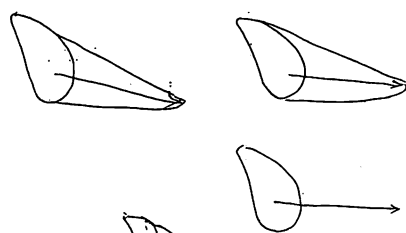
10時30分

たんだん
力をゆるめる

おれの練習



○右はらいのれん習

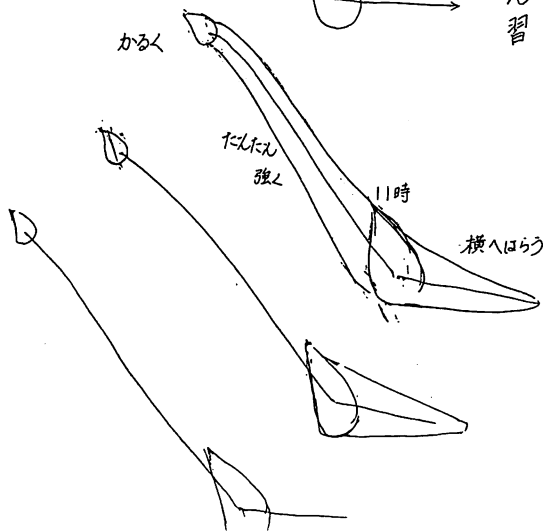


かみ

たんだん
強

11時

横へはらう



(7) 後始末

- ・筆……筆洗い用の水入れにつけて、墨汁を落とし、書き損じの紙でふき取らせた。そのとき、やさしく、筆先を整えるようにと言いながら、目の前でやって見せた。しかし、一度でなかなか定着せず、「水をしばってからふいて」と言うと、毛先をぞうきんのようにねじったり、紙でふき取るとき、筆先を紙ではさんで上下に動かし、毛をぼさぼさにしてしまったり、様々な失敗もあった。新品の筆のように整えられた筆を見せて「花丸」とか「百点満点」とか言うと、一生懸命整えて「これでいいか？」と見せにきてくれた。
- ・硯……残った墨をスポイトで吸い取った後、書き損じの紙ふき取らせた。硯も洗いたかったが、片付けに時間がかかるのと、洗い場が汚れるのとで、毎時間洗うのは見送った。
- ・ゴミの始末……各自スーパーの袋を持ってこさせ、教室にストックしておいた。半紙を四つ折り、八つ折りにすれば、スーパーの袋一つで十分である。時々、新聞紙を丸めてつっこんでいる子がいて、そんなときはいっぱいになったが……。
- ・かび……最近の書道セットは密閉生が高いのか、かびがよく発生した。しかし、筆を十分ふき取っていないため、筆巻きがかびだらけになったり、机を拭いたぞうきんをぬれたまま書道セットにしまい込んで、下敷きがかびだらけになったりと原因が、後始末のまずさによるものもあった。後始末の大切さを再度、皆で確認するよい機会になった。また、教師自身の気配りの足りなかったことを反省する材料となった。

3. 今後の課題

(1) 子ども中心

一学期はとにかく、筆に墨をつけて書くことに慣れ、道具の出し入れがスムーズにできるようになるので精一杯だった。用意は、前の休み時間にうちにすぐできるようになったが、後始末に手間取り、一学期当初は、終了10分前から、後始末の時間に当てたりするため、書く時間が十分とれなかった。こちらが、時間に追われながら、ここまでやりたいという思いが先行したため、「はい、次これして」と教師主導に授業が進められることが多かった。子どもたちにとっては、自分の書く一画一画が新鮮で、一画書くたびに感動の声をあげていたが、それに十分耳を傾けることなく、「次は半紙を出して」「次は黒板の方を見て、一画ずつ一緒に書いていくよ」というような感じだった。右はらいの学習の時、「どういうふうに書けばいい？」の問いかけに「一回止めるんだよ」と数人の子が水書板に書いてくれた。左はらいとの書き方の違いもたくさん見つけてくれた。十分時間がとれず、すぐ一律の練習用紙で練習という形をとったが、活動的で意欲的な三年生だけに、もっと自分たちで考えたり、みんな

で知恵を出し合ったりする授業ができたらと反省される。

(2) 二時間続き

今年は級外で、空き時間の関係もあり、難しかったが、一度だけ二時間続きで書写をやらせていただいた。黒板で師範したあと、各自で練習したり、机間巡視して、個別に手を持って書いてあげたりの時間が十分にとれた。ゆったりと時間が使え、子どもたちも気の済むまで書けたように思う。後始末も書写に位置づけ、慣れるという意味で週一時限の書写もよいかもしれないが、三年生の一学期は、書く時間の確保という点で、都合がつけば、二時間続きも有効ではと思った。

4. 終わりに

四月、五月、毎時間のように誰かが墨汁をこぼしたり、休み時間どころか 次の時間が始まって片付けていたのに、いつのまにか手際よく後始末ができるようになっていた。帰りの会でうれしそうに「右はらいが書けるようになってうれしかった」と言っていたよと担任から聞いてうれしくなった。とても貴重な三年生の一学期、教師自身反省だらけである。二学期以降、書写の時間が楽しみになるような授業を作れたらと思う。

画の接し方に注意して書く指導 (小学校2年 硬筆)

加賀市立南郷小学校 教諭 北村 千恵

1. はじめに

書写の指導は、小学校においては「楷書の指導」が中心的指導内容である。1・2年生は、それが硬筆において行われている。最近、毛筆学習と硬筆学習の関連を重視する指導がされることが多くなったが、1・2年生の硬筆学習においては、毛筆とどのように関連づけたらよいのかと疑問に思っていた。1・2年生は、まだ毛筆学習を始めていないので、今回は、板書などに提示する文字を毛筆で書くことにより、課題をよりつかみやすくすることを硬筆・毛筆の関連づけとして、授業を試みた。

2. 指導案

- ①題材名 かん字の画のつけ方
 ②ねらい 漢字の画の接し方に注意して正しく書くことができる。
 ③展開

学習内容・活動	指導上の留意点	準備
<p>1. 「口」「目」について</p> <p>①試し書きをする。</p> <p>②学習の目あてを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>画のつけ方に気をつけて書こう。</p> </div> <p>③試し書きを手本と比べる</p> <p>2. 「口」「目」の練習をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・筆順と空書で確認させてから書かせる ・姿勢、鉛筆の持ち方にも気をつけさせる。 ・毛筆文字（口、目）を見せ、接し方の違いをとらえさせる。 ・第2画と最終画を色つき画で表すことにより、接し方の違いを視覚に訴えてとらえさせる ・自己批正させる。 ・手本の最終画を色鉛筆でなぞって、しるしをつけさせることにより、接し方に注意を向けさせ、めあてをもって練習に取り組ませる。 ・一回ごとに批正させる。 	<p>試書用紙①</p> <p>文字カード (目・口) 色つき画</p> <p>練習用紙② 色鉛筆</p>

<p>3. 同型漢字の仲間分けをする。 「言・右・足・京・合・同」 「白・目・田・音・早・国」</p> <p>4. 同型漢字の練習をする。</p> <p>5. 清書する。 「口」「目」</p> <p>6. 試し書きと比べる。</p> <p>7. 次時の学習について知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・接し方に着目させ、「口」「目」の仲間に分けさせる。 ・毛筆文字を用いて、接し方を明確にさせる。 ・批正したことを生かして、正しくていねいに清書させる。 ・清書の反省をさせる。 ・姿勢・鉛筆の持ち方についても反省させる。 ・よいところを認め合わせ、向上の喜びを持たせる。 	<p>文字カード</p> <p>練習用紙③ 清書用紙①</p>
---	--	-------------------------------------

練習用紙

③ 画のつけかた

白		言	
目		右	
田		足	
音		京	
早		合	
国		同	

○ 画のつけかたに気をつけて書きましよう。

名頁

この字は、
「白」は「冫」で、「目」は「目」で、
「田」は「田」で、「音」は「音」で、
「早」は「早」で、「国」は「囗」で、
「言」は「言」で、「右」は「右」で、
「足」は「足」で、「京」は「京」で、
「合」は「合」で、「同」は「同」で、
それぞれに気をつけて書きましよう。

回

② 画のつけかた

手本

日	口
一回目	一回目
二回目	二回目
三回目	三回目

名頁

① 画のつけかた

へためし書きへへせい書く

□	□
()	()
□	□
()	()

名前 ()

画のつけかた ()

しせい ()

えんぴつのもちかた ()

△ ○ ●

・もうすこし
・まだまだ

「はたしてはなせいとみよう」

3. 反省と考察

- 事前調査（2年生 19名）

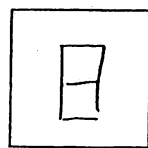
口 正しく書ける	4人
口 画と画がくっついていない	8人
口 最終画がでていない	3人
口 二画と最終画がぴったり	4人
目 正しく書ける	5人
目 画と画がくっついていない	4人
目 最終画がでていない	3人
目 二画と最終画がぴったり	4人
目 二画と最終画が交わっている	3人

どれも漢字テストをした場合は、誤りではないのだろうが、細い鉛筆の線では、画の接し方は、視覚的にもわかりにくく、意識としても無関心になりがちなようである。

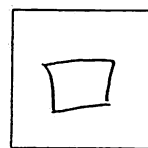
- 実態調査の結果からもわかるように画の接し方については、あまり意識のないことがはっきりしたので、授業の課題をつかませるためには、硬筆の拡大文字やチョークで示したのでは、児童の中にしっかりと問題意識を持たせることができないと判断した。そこで、提示する文字カードは、大きくて見やすく、接し方が視覚的にも明確になる毛筆文字を使うことにした。また、これが、硬筆と毛筆の関連にもなると考えた。

実際に毛筆文字を提示したが、予想どおり、児童の中から、最終画が「口」はでていて、「目」はでていないということが出てきた。硬筆の指導の中でも、毛筆文字を活用することで、より効果的な授業になるようだ。

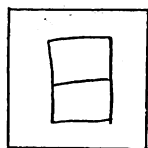
- 毛筆と違い、硬筆は、ケシゴムで消せるという利点がある。しかし、私は、あえて書写の時間にケシゴムを使わないことを原則としている。正しく整った文字を書こうとするあまりケシゴムの多用で、練習がはかどらないことが多く、また、毛筆のようなある程度の緊張感（失敗できない、やり直せない）を持たせたいと思っているからである。事実、低学年は、緊張が続かないので、何枚も何回も書くほどに上手になるかというところはならないことが多いからである。



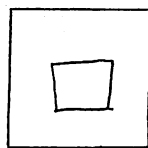
(△)



(△)



(◎)



(○)

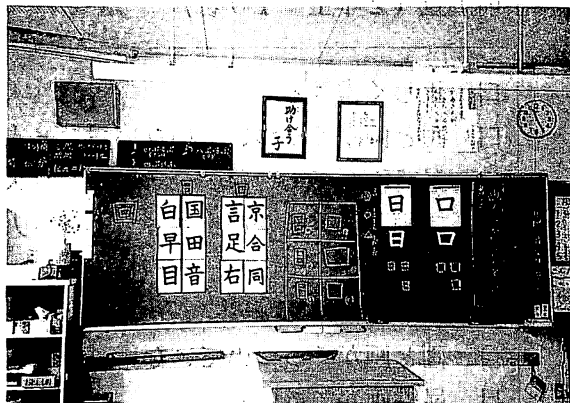
へためし書き
へせい書き

- 試し書きと清書を比べるとほとんどの児童が画の接し方については、正しく書けるようになったようである。練習用紙②で、練習する前に、最終画を色鉛筆でなぞった

効果もあったようである。ただ、手本と同じように書きなさいとか、ゆっくりていねいに書くことだけでなく、文字のどこを意識して書けば、正しく整った文字になるかというねらいをしっかりと持たせて練習させることが大切だと改めて感じた。

- ・ 試し書きと清書を同一用紙に書くことで、児童自身が自己の向上を自覚することができる。それにより、さらに励みを持つようである。もちろん、教師の励まし、ほめ言葉が大切なのは言うまでもないことである。
- ・ その他、基本をしっかり身につけさせるには、くり返し丁寧な指導が必要であり、これからも続けていこうと思っている。また、ふだんから、鉛筆の持ち方や書く姿勢は大切なことであるが、週一回の書写の時間を改めてそれを見直す場として位置づけていきたいと思う。

練習風景



練習風景



高校入試における書写の問題とその分析

金沢市立浅野川中学校 教諭 八田 和幸

1. はじめに

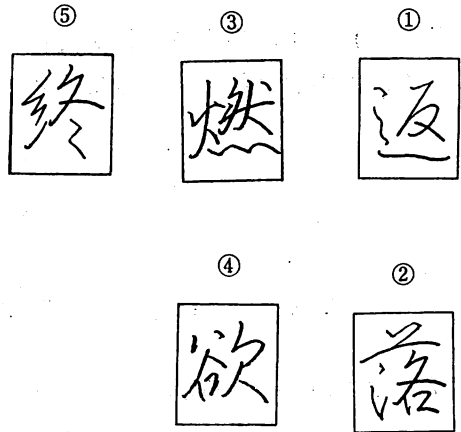
言わずもがなのことであるが、新学習指導要領において中学校の書写は、[表現]より[言語事項]に組み込まれた。ある面では、芸術的(美術的)側面よりも実用的側面にウェイトが置かれるようになった、と言って過言ではないと思う。言い方を換えれば、小学校における書写と高等学校における芸術科書道との橋渡しにおいて、小学校サイド(文字を書く、という基礎・基本を最大限重視する)に近寄った、と言ってよいと思う。(ただし、中学校書写で学習する中心は、楷書ではなく、美しさを兼ねながらの速さに重点を置いた行書となる。)これはまた、最近の児童・生徒の文字の乱れを、なるべく良い方向に、きちんと正そうとする指導者側の願いと、きれいに整った文字を書きたい、と願う学習者との両面のニーズから生まれてきた変化と言っても良いと思う。

では実際の高校入試が、前述の方向を促進する内容を持っているのか、確かめてみたいと思い、調査・分析してみた。(資料は全国高校入試問題正解 Obunshaより)

2. 95年度入試における書写の問題 一覧

①次は、本文中の漢字を行書で書いたものである。①～⑤のすべてに共通する行書の特徴として最も適切なものは、あとのア～カの中のどれであるか。一つ選んで、記号で答えよ。

- ア、左払いから横画への連続。
- イ、点画の省略。
- ウ、折れから横画への連続。
- エ、とめが、はねになる。
- オ、点から点への連続。
- カ、右払いが、とめになる。



(広島大学附属高等学校)

②この文章の中の「知」という漢字を楷書で書く場合、次の筆使いのうちで用いないものはどれか。適当なものを選んで、その記号を書け。

- ア、曲がり
- イ、折れ
- ウ、止め
- エ、払い

(福井県)

③次の1の行書体で書かれた漢字の部首名を平仮名で書きなさい。また、2の漢字の黒ぬりのところは何画目になるか、数字で答えなさい。

1、 程

2、 彼

(山口県)

④文章中の —— 線「非常」を行書で
書写するとして、正しいものを次の
ア～エから選び、符号で答えよ。

ア、 非常
イ、 非常
ウ、 非常
エ、 非常

(宮崎県)

⑤ひらがなは漢字をくずして生まれた
文字であり、例えば「か」は、下の
ような過程を経て生まれた文字であ
る。1. 2の場合はどうか。a・b
に入るひらがなををそれぞれ書きな
さい。

2	1	例
良	久	加
良	久	加
良	久	加
b	a	か

(山梨県)

⑥()の中の漢字を、行書で正しく
書いたのはどれか、記号で答えな
さい。

ア、 (注) イ、 (初) ウ、 (持) エ、 (詰)

住 初 特 結

(徳島県)

⑦文章中の —— 線部「詩」・「秋」・「道」・「節」について、行書で正しく書いたものはどれか。次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、 詩 イ、 秋 ウ、 道 エ、 節









(高知県)

⑧(1) 「瑠璃立羽」(るりたては)を片仮名で、字形に気を付けて、正しくていねいに書け。

(2) 下の□内の「春」の→印で示した画の筆使いを何と呼ぶか。その呼び方を書け。




- (3) 次のア～クのうち、行書で書いた「抜」の偏と旁はどれか。それぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

ア、  イ、  ウ、  エ、 
 オ、  キ、  ク、  コ、  (奈良県)

- ⑨本文中の — を付した漢字を、行書で正しく書いたものはどれか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア、  イ、  ウ、  エ、  (和歌山県)

- ⑩下の「展」の字の白い部分の点画は、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) とめ (2) はね (3) はらい (4) 曲がり  (岡山県)

書写の問題が含まれていたのは、調べた国立高校10校のうち1校、47都道府県公立高校のうち9県、私立高校32校中0校であった。ちなみに行書に関する出題が7問、仮名の出題1問、字形の出題1問、あとは筆使いに関するものが3問であった。内容的にはどの問題も基本的なものばかりで、特別に書写の勉強が必要となるものはなく、普通の文字を丁寧に書いていれば、解けるものばかりであった。目立ったのは、奈良県の(カタカナではあるが)字形を整えて書く実技的な出題、山梨県の平仮名の字源を訊ねる出題などがあった。

3. 96年度入試における書写の問題 一覧

- ①この文章の中の次の漢字を楷書で書く場合、第5画目に「払い」の筆使いを含んでいるものはどれか。その記号を書け。

ア、 広 イ、 赤 ウ、 的 エ、 別 (福井県)

- ②1の行書体で書かれた漢字の部首名を答えなさい

1  (山梨県)

③次は書写についての問題です。1～3の問いに答えなさい。

1、次の行書で書かれた漢字を、楷書で正しく整えて書け。

歡 迎

2、行書には、楷書と比べた場合いくつかの特徴がある。つぎの(1)・(2)の特徴をよく表しているのは、ア～オのどれか。それぞれ一つ選び、記号で答えよ。

(1)点画の一部を省略する場合がある。

(2)筆順が変わる場合がある。

ア、学 イ、取 ウ、和 エ、新 オ、生

3、()の漢字を楷書で書くとき、点画の連続の仕方が正しいものはどれか。一つ選び、記号で答えよ。

ア、(快) 快 イ、(可) 可 ウ、(探) 探 エ、(独) 独

(鹿児島県)

④次の漢字は、文章中の「降」をある書体で書いたものである。この書体を何というか。下の1～3から選び、記号で答えなさい。また、この漢字の部首名を平仮名で答えなさい。

降

書体 1、楷書体 2、行書体 3、草書体

(山口県)

⑤下の行書で書かれた漢字を楷書で書きなさい。

復

(宮城県)

⑥()の中の漢字を、行書で正しく書いたのはどれか、次のア～エから二つ選び、記号で答えなさい。

ア、(葉) 葉 イ、(象) 象 ウ、(開) 開 エ、(常) 常

(徳島県)

⑦文中の「私の一生の根になっている教えがある。」をつぎの①～③の注意に従って、楷書でていねいに書け。

(注意) ①文字の中心をそろえること。

②漢字と仮名とを調和させること。

③字形を整えること。

(奈良県)

⑧本文中の「後悔」を行書で正しく書いたものはどれか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

1 ア、  イ、  ウ、  エ、 

(和歌山県)

⑨「母」は五画の漢字である。矢印の部分は何画目に書くか。数字で答えなさい。



(沖縄県)

96年入試も私立高校では出題がなく、公立高校で9県の出題があった。しかも、行書の正誤を訊ねるものがほとんどで、目立った問題といえば、奈良県の「文字の中心」「漢字と仮名の調和」「字形」を要求している実技面をみる出題であろうか。それぞれの県において、伝統や歴史の違い、文化的風土の特色の違いなどがあって、すぐさま本県においても、実技的な面をみる入試問題が出題されても、教師も生徒も困惑するばかりであろう。しかし、高校入試がまさに試験であり、受験生を選抜(別)するものであったとしても、入試問題によって(書写)教育の流れがつけられるのも、また事実ではなかろうか。ていねいな文字を書き、美しく整った文字を書くことが、受験にも直結して役立つとなれば、書写の勉強にも力が入ろうというものではないでしょうか。(今までも間接的には役立っていたと思うが……。)

4. 今後の課題

研究としては、旧学習指導要領下での入試問題も調べた上で、比較検討すれば[表現]から[言語事項]に変わったことを、入試問題の上でもきちんと追跡できたかもしれない。機会があれば、行ってみたい。

また、入試とはやや性格が異なると思うが、普段の実践(いずれは50点満点ぐらいで、定期テストに組み入れて行ってみたい。)のなかで、「書写における評価」という観点で、実技面をあわせて、ペーパーによって「評価」を出すための問題を模索してみたい。良問とは、どんな体裁、形態をとるものがよいのか、どの程度の難易度までが許されるのか、

(中学1年生のレベル、2年生のレベル、同じく3年生のレベルに応じた出題)、得点分布のばらつき(正規分布に近い形)、知っておくべき価値のある出題、学習意欲を引き出す出題、などを考えていきたい。

Memo :

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

陸軍省 陸軍部 陸軍大臣

小楷学習の取り入れ

石川県立寺井高等学校 講師 山本尚美

一. はじめに

本校の芸術科目は、美術・音楽・書道の中から一科目選択必修で、次のような履修・学習内容である。

一年（1クラス30名 3クラス）……3単位

- ・書道Ⅰ
- ・ペン字テキスト
- 一学期 ・楷書（基本練習・古典の臨書と鑑賞）
 - ・行書（ 〃 ）
 - ・作品①（団扇に臨書作品）

- 二学期 ・隸書（基本練習・古典の臨書と鑑賞）
 - ・篆刻（朱文 名を一字刻す）
 - ・小楷学習（写経）
 - ・実用的書道（上書き・年賀状）

- 三学期 ・作品③（色紙に創作）
 - ・かな（基本練習・古典の臨書と鑑賞・作品②…半懐紙に臨書）

ところで、初回授業時に書道を選択した理由を聞いてみると、概ね次の通りである。

- ・実用的だから
- ・好きだから（上手になりたい）
- ・他教科が苦手（書道がおもしろそう）
- ・受けて損はないから（下手になりたくない）
- ・その他

但し、短期間でも塾に通ったことのある生徒が8割に相当する。

このような選択理由の生徒であるがゆえ、書道に対する意識をより高めさせ、実りのある教科にしたいと思う。

二. 小楷学習の設定理由 —— 写経「般若心経」

書を学ぶ場合、基本となる書体が楷書であろう。その筆法・結構法は、他の書体を学習する基本となることはいうまでもなく、小学校・中学校で学んできた書体である。高校では専門分野に入り、高校書道の眼目の一つである書の鑑賞眼を養い、また表現の幅

を広げさせる臨書力をつける指導が行われてきた。つまり最も永く多く接してきた書体であり、技術的・精神的に生徒には比較的受け入れやすいわけである。

ワープロ等の進歩で確かに書かなくて済むことの多くなった今日だが、しかし毛筆で直筆で、ということも多い。そのためにも小楷学習をすることが大切である。近年、芸術のジャンルにのみに生きるべく、その探求創造に没頭するあまり、書道の持つ内面的特質や実用的書写技能面が軽視され低下しがちであること、また芸術科書道に対する生徒個々に生じているギャップを少しでもなくすよう、今一度ここにおいて生徒に理解と評価を求めたいと思うのである。

三、指導の展開（配当時間 5 時間）

1. 練習（2 時間）

(ア)、教材の説明

小楷学習として取り入れた手本は、書道に対する意識・興味づけと、技術能力面から観ての生徒の実態・実用性を考慮し、字形が整然としている高野山の奥の院御前前奉経―「般若心経」―に準じた。

経典の文字を丹念に写す極めて単純な行いの中で、静かな落ちついた時間を大切にしてほしいということと、本来、写経は無念無想であろうが、書道の点からすれば、臨書力と鑑賞眼を大いに発揮して最善を尽くしたという満足感を味わえることを期したい。さらに自己の内面に存する集中力・緊張感そしてその持久力を計って知ることでも大切である。書道の持つ内面的特質の糧となろう。

(イ)、小楷学習上の注意

細字は、とかく点画を粗雑に書きやすいので、これまでの大字での学習を基礎に、起筆・送筆・収筆……等々の基本をしっかり手に入れ、細字特有の筆使いをうまく加えることが大切である。さらに一画一画がいかに正確に書かれていても、筆を運ぶ気脈が貫通してなければならぬ。同時に各字固有の外形・肥瘦（細太・長短・大小）をはっきりさせて、中心を揃え、行の曲がりを防ぐことが書くコツである。

(ウ)、写経について

写経を行うにあたっての心構えと誤字脱字が生じた場合の処置法を説明する。姿勢を正しく、一字一字を手本と比べ、誤りのないことを確認しながら慎重な心構えで書く。一気に書こうとすると、字が乱れたりして永続きしないことに注意する。誤字を認めたときは、その右側に点を打ち、行の末尾にその字を書くようにする。また脱字の場合は、そのまま下の空いたところに書いておけばよいことを指導する。

特徴となる字形は正方形、またはやや横長の偏平形であり、間架結構がよく整い、端正で清楚な印象を受けるが、洗練された性情を示している。点画の隅々まで筆力が充実していることを中心に理解させる。尚、写経用紙を用いるので作品に近い状態で

仕上げたいものである。

(エ)、試書（敷き写し書き）

手本の実寸大を下敷に、一字一字の間隔を取った用紙を載せて試書する。字形・文字の大小・行による字数の相違・時間の配分……等々を確認するように指導する。

2. 清書（3時間）

一字一字の間隔をとった罫紙（下敷）一枚と手本と清書用紙を準備し、写経をするにあたっての諸注意を再確認する。名前を書いて、末尾に「慎書」と記し、押印する。

3. まとめ（一年間の反省を含む）

生徒に写経を体験した感想を聞いてみた。ここに列挙してみる。

(ア)、良い体験をした……約74%

その理由・内容（ほぼ原文通り）

- ・もう一度挑戦したい。
- ・おもしろかった。よかった。
- ・まあまあよかった。
- ・一字の間違いもなく書けた。
- ・一字だけ間違えてくやしい。
- ・行を間違えたのがくやしかったけれど…
- ・緊張感があった。
- ・根気がいると思った。
- ・神経は疲れたがおもしろかった。
- ・むずかしかったが…
- ・坊さんになった気がした。
- ・自分の集中力のなさを発見した。
- ・疲れたが心がきれいになったような気がする。
- ・こんなに細かくて長いものを書いたことがなかったので…
- ・緊張していないと、字・行を間違えてしまうのがわかった。
- ・心が吸いつけられるようで、終わったあとポウツとしてしまった。
- ・その日によって細くなったり太くなったり、大きくなったり小さくなったり、震えたりして、うまく書けたり書けなかったりするのがよくわかった。
- ・時間がかかった。（1～2時間多く要した者が各クラス4分の1程度）

(イ)、よくなかった……約22%

その理由・内容

- ・イライラしてきた。
- ・暗い気分になった。
- ・自分に合っていない。
- ・むずかしい。
- ・目が痛くなったし、肩が凝った。
- ・あきた。
- ・邪魔くさい。（2時間で書き終えた。）

(ウ)、わからない……約4%

以上、様々な感想が出たが、概ね単元設定の目標に近づけたのではないかと思う。無念無想の気持ち、状態、さらに最善を尽くし書き終えたという気持ちが非常に満足を与えたと思う。それはやや普通の書道の作品を書いたときと異なった満足感であろう。次いで二人の生徒の、アンケートに書いた全文を挙げてみる。

- ・自然に身体中の神経が写経の一文字一文字に集中した。途中、やめなくなっただけ、出来上がったらうれしくなった。いい経験をしたと思う。授業はなかなか楽しいし、結構興味がひかれる授業だと思う。
- ・思ったよりたいへんなことだと思った。実際、私は何度も間違えてしまった。一字一字間違えないで書くのはとてもむずかしいことだと思った。そして、「毛筆というものは消しゴムがない」と、今また実感した。これからの授業ではもっと一字一字を真剣に心をこめて書いて行きたいと思う。今までとても書道という授業を軽く思っていた。書道だからという気持ちがあった。もっと真剣に取り組めば良かった。

四. おわりに

書というものが、いかに内面的に奥深く、芸術性価値の高いものであるか認識でき、又さらに今後の学習に対する姿勢、取り組みの橋渡しになったような気がする。

小楷学習として、今回は「写経」という言葉により、生徒自身の心構えを引きしめたいと思い、一番短くて一巻で完結している「般若心経」を教材に用いたが、他に楽毅論、老子道德経、美人董氏墓誌銘等の古典を臨書するのもよいであろう。

尚、この単元の学習における成績の評価は行っていない。

手 本

平成 年 月 日	右為	寫經願主(氏)	名體書印	摩訶般若波羅蜜多心經
				觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五 蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不 異色色即是空空即是色受想行識亦復如 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨 不增不減是故空中無色無受想行識無眼 耳鼻舌身意無色声香味觸法無眼界乃至 無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死 亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無 罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢 想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜 多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等 呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜 多呪即說呪曰
				般若心經 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色声香味触法無眼界乃至
無意識界無無明亦無明尽乃至無老死無
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神呪是大明呪是無上呪是等等無
呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
多呪即說呪曰

揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶

般若心經

右為 報恩謝德

写經願主 津輕美香

平成六年十二月十五日

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色声香味触法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神呪是大明呪是無上呪是等等無
呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
多呪即說呪曰

揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶

般若心經

右為 報恩謝德

写經願主 平加美和慎書

平成六年十二月十六日

Memo :

一、關於此次會議之重要意義，應予充分之認識。此次會議，不僅是黨內之重要會議，且為我黨在抗戰建國過程中，具有決定性意義之會議。其目的在於統一全黨之思想，明確抗戰建國之方針，並加強黨內之團結與合作。

二、會議之中心任務，在於討論當前抗戰建國之重大問題。包括：(一) 關於抗戰前途之認識，應堅定信心，堅持持久戰，並加強國際合作。(二) 關於建國綱領之實施，應堅持新民主主義，實行民主改革，發展民族工業，改善民生。(三) 關於黨內團結之加強，應堅持民主集中制，反對宗派主義，加強黨內之批評與自我批評。

三、會議之決議，應切實執行。各級黨組織應認真貫徹執行會議之決議，並加強宣傳與解釋工作，使全黨同志自覺地執行會議之決議。

四、會議之總結，應由中央負責起草，並在全黨範圍內進行宣傳。

五、關於此次會議之重要意義，應予充分之認識。此次會議，不僅是黨內之重要會議，且為我黨在抗戰建國過程中，具有決定性意義之會議。其目的在於統一全黨之思想，明確抗戰建國之方針，並加強黨內之團結與合作。

六、會議之中心任務，在於討論當前抗戰建國之重大問題。包括：(一) 關於抗戰前途之認識，應堅定信心，堅持持久戰，並加強國際合作。(二) 關於建國綱領之實施，應堅持新民主主義，實行民主改革，發展民族工業，改善民生。(三) 關於黨內團結之加強，應堅持民主集中制，反對宗派主義，加強黨內之批評與自我批評。

七、會議之決議，應切實執行。各級黨組織應認真貫徹執行會議之決議，並加強宣傳與解釋工作，使全黨同志自覺地執行會議之決議。

八、會議之總結，應由中央負責起草，並在全黨範圍內進行宣傳。

蘇東坡の学書に対する考え方について

金沢大学大学院教育学研究科 新谷 幸一

1. はじめに

私は大学三年の春から書に親しむようになり、これまで二年半の間、大学の講義や放課後を利用して書を学んできた。時には思いどおり書けないはがゆさに書を嫌いになりかけたこともあった。しかし、少しでも自分でうまくなると感じると、その度にまた書きたくなってくる。書には不思議な魅力があるのではないだろうか。

私は書を学ぶと同時に、書論についてもわずかながら学んだ。そうして、古人もまた様々な書の魅力にとりつかれていたことが分かった。その中でも特に印象が強かったのは蘇東坡である。蘇東坡の書論は私がこれまで書を学ぶうえでも心の支えとなってきた。

蘇東坡の書論は早くから日本に伝わっていて、現代の書に対する考え方にもかなり影響を与えているように思われる。蘇東坡の書論を知ることが、現在における書の考え方に対する理解を深めることにもなるのではないだろうか。

私たちは何のために書を学ぶのか、それは人それぞれ違うと思うが、楽しいから書を学ぶのだと考えている人もいると思う。では、その楽しみとはどんなことだろうか。また、書を学ぶにはどのようなことに気をつけなければならないのだろうか。そういったことに対して蘇東坡は自らの意見を私たちに残してくれている。

本稿では、書に対する理解を深めるために、蘇東坡の書論を見ていきたいと思う。またその中で、蘇東坡が何のために、またどのような過程を通して、どのように書を学んだのかを明らかにしていきたい。

2. 書を学ぶ目的

はじめに、蘇東坡は何のために書を学ぼうとしたのかを考えたい。

蘇東坡の有名な詩に「石蒼舒醉墨堂」があるが、その詩の冒頭部分で蘇東坡は書について次のように述べている。

人生識字憂患始
姓名粗記可以休
何用草書誇神速
開卷恂怍令人愁
我嘗好之每自笑
君有此病何年瘳

人生字を識るは憂患の始め
姓名粗(ほぼ)記すれば以て休(や)むべし
何ぞ用いん草書の神速を誇るを
巻を開けば恂怍(しょうきょう)として人をして愁えしむ
我嘗て之を好み毎に自ら笑う
君此の病有り何れの年にか瘳(いえ)ん

この詩の冒頭部分で蘇東坡は「字を識る」ことは「憂患の始め」であると、老荘思想的な目から見た書に対する考えを述べている。蘇東坡は、生活に差し支えないだけの字が書ければ十分であり、わざわざ上達を求め、それを自慢したりするのは意味のないことだと述べている。また、上達を望むためにかえって悩みが増えるのだとさえ述べている。ところがその後半で、蘇東坡自身も結局は書が好きで、止めることができないと自嘲しているの

である。この詩の冒頭部分では、蘇東坡は書の必要性の問題を述べているというよりはむしろ書の魅力の大きさを述べているのだと思われる。この詩には、たとえ止めようとしても止められないほどに書を楽しむ蘇東坡の姿が表れている。

では、何故蘇東坡はそれほどに書を楽しむ、止めることができなかつたのであろうか。

『東坡題跋』巻四の「題筆陣圖」に、それを考える手掛かりになるとと思われる、次のような文章が見られる。

筆墨之迹、託於有形。有形則有弊。苟不至於無、而自樂於一時、聊寓其心、忘憂晚歲、則猶賢於博奕也。雖然不假外物、而有守於內者、聖賢之高致也。惟顔子得之。

筆墨の迹、形有るに託す。形有れば則ち弊(やぶ)る有り。苟(いや)しくも無に至らずして、自ら一時を楽しみ、聊(いささ)か其の心に寓して、憂を晩歳に忘るれば、則ち猶お博奕(はくえき)に賢(まさ)るなり。然りと雖も外物に仮らずして、内に守る有るは聖賢の高致なり。惟だ顔子のみ之を得たり。

蘇東坡は「外物に仮らずして、内に守る」顔子(顔回)を「聖賢の高致」として高く評価している。「外物に仮らずして、内に守る」とは自分の身の回りの事物に頼ることなく、自分の心が常に落ち着いて、満足している状態である。しかし蘇東坡は、自分は顔回のように聖賢の境地に至ることができないこと述べている。そして、何か心に寄せて日を送らねばならないならば、博奕よりは書のほうがましであると考え、書によって憂いを忘れようとしたのである。

だが、蘇東坡が書を求める理由はそれだけではない。蘇東坡が書の楽しみについて述べた文章に次のようなものがある。

作字要手熟、則神氣完實而有餘韻。於靜中自是一樂事。

字を作るに手の熟するを要せば、則ち神氣完実し余韻有り。靜中に於いて自ら是れ一樂事。

(「記與君謨論書」、 『東坡題跋』巻四)

書が習熟すると精神が充実し、余韻が生まれる。蘇東坡は書にこの「神氣の完実」と「余韻」を求めていたのではないだろうか。そして、心が落ち着いた状態で「神氣の完実」と「余韻」を得ることが「靜中の一樂事」とであると蘇東坡は述べている。

「靜中の一樂事」と同じ考え方は、蘇東坡の師である歐陽脩の書論にも見られる。

有暇即學書非以求藝之精。直勝勞心於他事爾。以此知不寓心於物者真所謂至人也。寓於有益者君子也。寓於伐性汨情而為害者愚惑之人也。學書不能不勞、獨不害情性耳。要得靜中之樂者惟此耳。

暇有らば即ち書を学ぶは芸の精を求むる以(ゆえん)にあらざるなり。直(た)だ心を他事に勞するに勝(まさ)るのみ。此れを以て心を物に寓せざるを知るは真に所謂(いわゆ)る至人なり。益有るに寓するは君子なり。性を伐(き)り情を汨(みだ)すに寓し害を為すは愚惑の人なり。書を学ぶは勞せざる能(あた)わざるも、独り情性を害せざるのみ。靜中の楽しみ

を得るを要(もと)むるは惟(た)だ此れのみ。

(「學書靜中至樂説」、『筆説』)

「静中の楽しみ」とは、心が落ち着いて乱れることがない中で得られる楽しみである。歐陽脩は情性を損なうことがないために「静中の楽しみ」を得ることができると考えている。蘇東坡は師である歐陽脩からこうした考えを学んだのではないだろうか。

蘇東坡の学書の目的は、静中の楽しみを得て、神気を充実させ、余韻を得ると同時に、憂いを忘れようとしたことにあったと思われる。

3. 書を学ぶ過程

次は蘇東坡が書を学ぶ過程についてどのように考えていたかを明らかにしたい。

蘇東坡の学書過程についておおまかに言えば、蘇東坡はまず「古法を学ぶ」ことが必要であるとした。そして、それを「習熟」させ、最後に「新意を出だす」ことが必要であると考えていた。

ここで、蘇東坡が必要だと考えている、「古法を学ぶ」・「習熟」・「新意を出だす」ということについて蘇東坡が述べている文を参考に挙げておく。なお、習熟についての例文は第2節の「記與君謨論書」(『東坡題跋』卷四)なのでここでは省略する。

草書祇要有筆。霍去病所謂不至學古兵法者為過之。魯直書去病穿域蹋鞠。此正不學古兵法之過也。學即不是、不學亦不可。

草書は祇(まさ)に筆有るを要す。霍去病の所謂(いわゆる)古の兵法を学ぶに至らざる者は之を過てりと為す。魯直の書は去病の域を穿ち蹋鞠(とうきく)するがごとし。此れ正に古の兵法を学ばざるの過ちなり。学べば即ち是ならずも、学ばざるも亦た可ならず

(「跋黃魯直草書」、『東坡題跋』卷四)

沈遼少時、本學其家傳師者、晚乃諱之、自云、學子敬。病其似傳師也。故出私意新之、遂不如尋常人。

沈遼少(わか)き時、本其の家の伝師なる者を学びしも、晩(のち)乃ち之を諱み、自ら云う、子敬を学ぶと。其の伝師に似るを病(はばか)ればなり。故に私意を出だして之を新たにし、遂に尋常の人の如きにあらず。

(「論沈遼米芾書」、『東坡題跋』卷四)

柳少師書、本出於顔、而能自出新意。一字百金、非虚語也。

柳少師の書、本顔より出でて、能く自ら新意を出だす。一字百金、虚語にあらざるなり。

(「書唐氏六家書後」、『東坡題跋』卷四)

これらの例文に示されるように、蘇東坡は古法を学ぶことを大事だとし、習熟によって神気を充実させ、新意を出だすことを良しとしている。

では、何故これらのことが望まれるのだろうか。次に、それらについて、もう少し詳しく

く蘇東坡の考えを見ていくことにする。

3-1 古法を学ぶ

前の例文「跋黃魯直草書」（『東坡題跋』卷四）で蘇東坡は古法について「学べばそれでいいわけではないが、学ばないのもいけないことである」と述べている。では、何故蘇東坡は古法を大事にしたのであろうか。

それを解く鍵になりそうな文が、蘇東坡の師、歐陽脩の書論に見られる。

蘇子美嘗言用筆之法此乃柳公權之法也。亦嘗較之斜正之間、便分工拙。能知此及虚腕、則羲獻之書可以意得也。因知萬事皆有法。楊子云、斷木為棋、剗革為鞠。亦皆有法。豈正得此也。

蘇子美嘗て用筆の法を言うに此れ乃ち柳公權の法なり。亦た嘗て之を斜正の間に較べ、便(すなわ)ち工拙を分く。能く此れ及び虚腕を知れば、則ち羲獻之の書も意を以て得べきなり。因りて万事皆法有るを知る。楊子云う、木を斷りて棋を為(つく)り、革を剗(けず)りて鞠を為す。亦た皆法有り。豈(あ)に正に此れを得んや。 (「用筆之法」、『試筆』)

歐陽脩は物事にはすべて法が備わっており、書においても法があることを述べている。蘇東坡の書論は師である歐陽脩の書論と非常に似ており、蘇東坡は歐陽脩から多くの考え方を学んでいると考えられている。蘇東坡はこの「万事皆法あり」という考え方も歐陽脩から学んでいたのではないだろうか。そのため書を学ぶには法を知ることが大事なことでありと考へ、書における法として当時伝統的に良しとされてきた古法を目標としたのだと思われる。

蘇東坡はまた、古法を学ぶ必要性について次のように述べている。

居士之在山也、不留一物。故其神與萬物交、其智與百工通。雖然、有道有藝。有道而不藝、則物雖形於心、不形於手。

居士の山に在るや、一物をも留めず。故に其の神、万物と交わり、其の智、百工に通ず。然りと雖も、道有り、芸有り。道有りて芸ならずんば、則ち物心に形(あらわ)れると雖も、手に形(あらわ)れず。

(「書李伯時山莊圖後一首」、『蘇東坡全集』前集第二十三卷)

蘇東坡はこの文の中で、道があっても、芸がなければ、心の中に現れたものが手に現れないと述べている。蘇東坡は心の中のものを上手く表現するために技術的な進歩を必要としているのである。

蘇東坡はこの文の中で芸が道にとって必要であることを説いていた。では、蘇東坡は道と芸の関係についてどのように考えていたのだろうか。それが分かる文に次のものがある。

技進而道不進、則不可。少游乃技道兩進也。

技進み道進まざれば、則ち可ならず。少游乃ち技道兩(ふた)つながら進むなり。

(「跋秦少游書」、『東坡題跋』卷四)

獨蔡君書、天資既高、積學深至、心手相應、變態無窮、遂為本朝第一。

獨り蔡君の書、天資既に高く、學を積むこと深く至り、心手相(あ)い応じ、變態窮まり無く、遂に本朝第一と為す。

(「評楊氏所藏歐蔡書」、『東坡題跋』卷四)

技も手も芸とほぼ同じものを指すと思われる。蘇東坡はこれらの文の中で、書の上達に対し、「心手相應」の姿を望んでいた事が分かる。「心手相應」の考え方は、唐代の書論に見られる考え方で、人間の内面と技術がともに進歩しなければならないという考え方である。技術が進んでも本人の精神の成長がなければだめであり、逆に精神が成長しても、技術がそれに伴わないと心にあるものが手に出ないのでそれもまたいけない。そのために、蘇東坡は技術と精神の両面の向上を望んでいるのである。

蘇東坡は技術を上達させるために古法を学んだ。では、精神の向上はいつ行われるのだろうか。それは次の習熟と関係があると思われる。

3-2 習熟

習熟についての蘇東坡の考えは第2節で挙げた「記與君謨論書」(『東坡題跋』卷四)に述べられている。その跋において蘇東坡は、習熟によって神気が充実し、余韻が生じることを述べている。この習熟による神気の充実や余韻が精神的な向上に入るのではないだろうか。なぜなら、蘇東坡が書を学ぶ上での楽しみだと考えていたのが、この神気の充実や余韻を得ることであつたし、次の新意を出だすという考え方にも技術の上達と神気の充実や余韻が関係してくるからである。

習熟は単に技術の上達ばかりでなく、精神の向上も望まれる。それ故、厳しいことが予想されるが、蘇東坡は特に書の上達の難しさや上達を目指すことの厳しさについて次のように述べている。

筆成冢、墨成池、不及羲之、即獻之。筆秃千管、墨磨萬鋌、不作張芝、作索靖。

筆冢を成し、墨池を成すも、羲之に及ばずして、即ち獻之。筆千管を秃(とく)し、墨萬鋌を磨るも、張芝と作(な)らずして、索靖と作る。

(「題二王書」、『東坡題跋』卷四)

昔人求書法、至拊心嘔血而不獲。求安心法、裸雪沒腰、僅乃得之。

昔人書法を求むるに、心を拊ち血を嘔くに至るも獲ず。心を安んずる法を求めて、雪に裸(はだぬ)ぎ腰を没して、僅(わずか)に乃ち之を得る。

(「跋所書清虛堂記」、『東坡題跋』卷四)

これらの文から蘇東坡は書の上達には大変な努力が伴うことを自覚していたことが分かる。書の喜びとはこうした努力をしてでも得たいと思われるほど、大きなものなのだろう。

3-3 新意を出だす

蘇東坡は学書過程の最後の段階として新意を出だすことを挙げている。では新意を出だ

すとはどういうことなのであろうか。また、蘇東坡の書論などを中心に考えていきたい。
蘇東坡は『東坡題跋』巻四の「書王奥所蔵太宗御書後」において次のように述べている。

太宗皇帝以武功定禍亂、以文
徳致太平。天従之能、溢于筆
墨、擒藻尺素之上、弄翰團扇
之中。

太宗皇帝武功を以て禍亂を定し、文徳を以て太平を
致す。天従の能、筆墨に溢れ、藻を尺素の上に擒
(し)き、翰を団扇の中に弄ぶ。

この文章中にある「天従の能、筆墨に溢れ」という考えが新意を出だすことができる一つの原因ではないだろうか。「天従の能」とは生まれつきの能力や才能のことで、十人十色のものである。この天従の能が書く字に現れるため、一人一人の字が少なからず違ってくるのである。新意を出だすというのは自分が学んでいた書家の字をそっくり真似るだけで終わるのではなく、自己の天性の能力、それが個性につながると思うが、そういったものを込めなければならないということであろう。

ここで新意を出だすことについて気をつけたいことがある。それは新意は意図的にねらって出すものではなく、自然に滲み出てきたものでなくてはならないのではないかということである。前の「天従の能、筆墨に溢れ」という考えで蘇東坡は「溢れ」という言葉を使っている。溢れるというのは物が満ちて容器の容量を越えた時に、自然に起きることであり、意図的にはできないことである。

では、どうすれば自然に出るのか。ここで、これまでの「古法を学ぶ」ことと、「習熟」が意味を成してくるのである。初めは、誰もが生まれつき持っている能力も、技術不足などのために十分に発揮できなかった。しかし、古法を学び、習熟することで、技術が上達して心の中のものを自由に表現することが可能になった。また同時に自己の中で神気が充足し、心にも余韻が生じるようになる。そうした時に初めて、神気に満ちた自己の内面の器から天従の能が自然に筆墨に溢れ出るのであろう。

蘇東坡は自分自身の書について次のように語っている。

吾書雖不甚佳、然自出新意、
不踐古人。是一快也。

吾が書甚だしくは佳ならずと雖も、然れども自ら新
意を出だし、古人を踐(ふ)まざるなり。是れ一快な
り。 (「評草書」、『東坡題跋』巻四)

蘇東坡は自分自身の書が古人の真似ではなく、自らの意を加えることができたものだと喜んでいいる。蘇東坡にとって他人の模倣で終わることはどうしても避けたいことであつたのだろう。歐陽脩の『筆説』に「其れ他人を模倣するは之を奴書と謂う」という言葉があるが、蘇東坡もこの考えを強く受け継いでいたと思われる。蘇東坡の得た喜びは、古法を懸命に学び、それが習熟するに至って、ようやく自分らしさが出せるようになった喜びであり、その喜びは大きなものだったのであろう。

4 おわりに

蘇東坡は書に精神の充実や余韻といったような楽しみを感じ、そうした楽しみを得たり、

憂いを忘れるために書を学んでいたことが分かった。また、学書過程においては古法を学び、習熟に励んだ。それは新意を出だす為の、心手相応の上達の為であった。古法を学び、習熟する中で、書の技術が上達し、同時に自己の精神が充実して、余韻が生まれる。そして、充満しきった神気とともに自己の天従の能が筆墨に溢れ出た時に、はじめて他の誰のものでもない自分の書ができるというのであった。蘇東坡はそんな学書のありかたを考えていた。

私はこれまで書の技術といった表面的なことにはばかり気を取られていた。今回蘇東坡の書論を読み直して、改めて思い知らされることも多かった。現在、書を学ぶ人の中にも、やはり何か考えさせられる人が多いのではないかと思われる。この蘇東坡の書論は中国の長い歴史の中での一人の書家の意見に過ぎないかもしれないが、それでも得るところは多かったように思われる。

最後に今回、この文章を書くにあたり、金沢大学教育学部園家榮照先生、押木秀樹先生から多くのアドバイスを頂きました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- ・杉村邦彦訳／「東坡題跋 卷四 蘇軾」／『中國書論大系 第四卷 宋1』／中田勇次郎編／二玄社／1981年
- ・『蘇東坡全集』（全二冊）／北京市中華書店／1986年
- ・中田勇次郎著／「歐陽脩の筆説・試筆」／『中國書論集』／二玄社／1980年
- ・村上哲見／「詩にみる蘇東坡の書論」／『書道研究』1990. 11／萱原書房

Memo :

一、關於... (The text is extremely faint and largely illegible, appearing to be a list of points or a report.)

連 盟 の あ ゆ み
連 盟 役 員 一 覧
大 会 役 員 一 覧
連 盟 規 約

石川県書写書道教育連盟のあゆみ

1987. 1. 23 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談する会を発足させる。(昭和62年) (1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)

1988. 4. 22 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ [金沢大学教育学部書道演習室] (昭和63年) (1991. 10. 17迄に24回開催する。)

1989. 8. 29 石川県書写書道教育連盟設立総会 [ホテル六華苑] (平成元年) (平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定)

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

名誉顧問	金子曾政<元金沢大学学長>	
顧問	南 和男<石川県教育長>	
相談役	北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清	
会長	藤 則雄<金沢大学教育学部長>	
副会長	[石川県教育委員会学校指導課長]	三宅正敏
	[金沢市小学校教育研究会書写部長]	河本隆成<金沢市立馬場小教頭>
	[金沢市中学校教育研究会習字部長]	大野重幸<金沢市立金石中校長>
	[石川県高等学校教育研究会書道部会長]	佐藤政俊<金沢女子高校長>
	[石川書写の会会長]	山田泰正<鹿島町立越路小校長>
	[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	法水光雄<金沢大学助教授>
理事長	[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 兼 任	
副理事長	: 幼・保部:	嘉門久直<森本幼稚園長>
	: 小学校部:	森川登夫<津幡町立中条小校長> 谷村修次<小松市立蓮代寺小校長>
	: 中学校部:	松寺淳照<金沢市立森本中教頭>
	: 高校部:	中山武久<津幡高校教諭>
監事	吉田一郎<小松市立向本折小校長>	
	木本峰生<七尾市教育委員会学校教育課長>	
理事	: 県教委学校指導課:	
	[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事]	永井志津子
	[高等学校(芸術科書道)担当指導主事]	高沢幹夫
* 金沢地区		
: 幼・保部:	青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>	
: 小学校部:	林 道子<南小立野小教諭>	中川晃成<館野小教諭>
: 中学校部:	干場和子<野田中教諭>	古本佳世<野田中教諭>
: 高校部:	林 昭悦<金沢女子高教諭>	石浦義彦<金沢泉丘高教諭>
: 障害児学校部:	南 進 <県立養護学校教頭>	
* 加賀地区		
: 小学校部:	穴田孝子<三谷小校長> 川筋登史己<向本折小教頭> 市村良二<木場小教諭>	
: 中学校部:	阿戸壮一郎<丸ノ内中教頭>	
: 高校部:	東野洋子<小松市立女子高教諭> 北室正枝<金沢西高講師>	
: 障害児学校部:	川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>	
* 能登地区		
: 小学校部:	西野和代<天神山小学校長> 福田教導<金ヶ崎小学校教頭>	
: 高校部:	嬬喜代子<飯田高校教諭> 大場豊治<七尾高校教諭>	
事務局		
: 事務局長:	永江芳教<金沢商高教諭>	
: 副事務局長:	久田英夫<金沢中央高校教諭>	中川晃成<館野小教諭>
: 庶務部: 部長:	中田稚子<森本中教諭>	副部長: 宮嶋雅美<明和養護学校教諭>
: 会計部: 部長:	佃さえ子<千代野小教諭>	副部長: 八田和幸<鳴和中教諭>
: 研究部: 部長:	金田京子<宇ノ気小教諭>	副部長: 嵐 雪絵<金大付属中講師>
: 会報部: 部長:	板橋法子<河南小教諭>	副部長: 西尾恵美子<中島小教諭> 大坂育代<湯野小教諭>
: 研修部: 部長:	八田和幸<鳴和中教諭>	副部長: 北村千恵<山中小教諭>
: 調査部: 部長:	大浦 努<大浦小教諭>	副部長: 宮崎聡美<松波小教諭> 西川真理<野々市小教諭>

11. 15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
 ~17 平成元年度財団法人全国書道教育部門会《後援》

12. 1 第1回理事会 [金沢商業高等学校]
 12.10 『石川県書写書道教育』(創刊号) 発行
 1990. 5.18 第2回理事会 [金沢商業高等学校]
 (平成 2年) 10. 1 『石川県書写書道教育』(第2号) 発行
- 11.19 第1回石川県書写書道教育研究大会
 [金沢市立南小立野小学校・金沢市立野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第3回理事会
1991. 2.23 第4回理事会
 (平成 3年) 3. 1 『石川県書写書道教育』(第3号) 発行
 6. 4 第5回理事会 [金沢商業高等学校]
 10.30 『石川県書写書道教育』(第4号) 発行
- 11.18 第2回石川県書写書道教育研究大会
 [野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]
 第6回理事会
1992. 3.26 第7回理事会 [金沢ガーデンホテル]
 (平成 4年) 3.30 『石川県書写書道教育』(第5号) 発行
 5.28 第8回理事会 [金沢中央高等学校]
 10.20 『石川県書写書道教育』(第6号) 発行
- 11.18 第3回石川県書写書道教育研究大会 [金沢市立鳴和中学校]
 第9回理事会
1993. 3.30 『石川県書写書道教育』(第7号) 発行
 (平成 5年) 6. 4 第10回理事会 [金沢中央高等学校]
- 11.18 第4回石川県書写書道教育研究大会
 [石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第11回理事会
1994. 3.31 『石川県書写書道教育』(第8号) 発行
 (平成 6年) 6. 4 第12回理事会 [金沢中央高等学校]
 第4回石川県書写書道教育研究大会第1回実行委員会
- 10.19 第5回石川県書写書道教育研究大会 [小松市立女子高等学校・小松市立安宅小学校]
 第13回理事会
12. 1 『石川県書写書道教育』(第9号) 発行
 1995. 3.30 『石川県書写書道教育』(第10号) 発行
 (平成 7年)

第6回石川県書写書道教育研究大会経過報告

4. 8 第4 3回石川県書写書道教育懇談会 (金沢中央高等学校)
 4.24 第4 4回石川県書写書道教育懇談会 (金沢中央高等学校)
 5.15 第4 5回石川県書写書道教育懇談会 (金沢大学教育学部)
 5.25 第4 6回石川県書写書道教育懇談会 (鹿島町立越路小学校)
6. 6 第14回理事会 [金沢商業高等学校]
 第6回石川県書写書道教育研究大会第1回実行委員会
 第6回石川県書写書道教育研究大会要項決定
7. 5 第1次案内発送
 7.11 研究発表検討会 (七尾養護学校)
 9. 7 第4 7回石川県書写書道教育懇談会 (金沢大学教育学部)
 9.20 第1次案内発送
 『石川県書写書道教育』(第11号) 発行
 9.21 公開授業指導案検討会 (越路小学校)
 10. 5 第4 8回石川県書写書道教育懇談会 (金沢大学教育学部)
 10.16 第6回石川県書写書道教育研究大会第2回実行委員会

平成7年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>

顧問 ☆寺西盛雄<石川県教育長>

相談役 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 水田茂良 横西 清

参与 吉田一郎 森川登夫

会長 藤 則雄<金沢大学教育学部長>

副会長

[石川県教育委員会学校指導課長]	☆中谷一男
[石川県私立幼稚園協会理事長]	源 通 <妙源寺幼稚園園長>
[金沢市小学校教育研究会書写部長]	河本隆成<金沢市立西南部小学校校長>
[金沢市中学校教育研究会習字部長]	☆寺井亮三<金沢市立浅野川中学校校長>
[石川県高等学校教育研究会書道部会長]	南谷直彦 <県立津幡高等学校校長>
[石川県特殊教育諸学校校長会代表]	☆南 進 <県立七尾養護学校校長>
[石川書写の会会長]	河本隆成 < 兼 任 >
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	押木秀樹<金沢大学教育学部助教授>

理事長 中山武久<県立金沢泉丘高等学校教諭>

副理事長：幼・保部：

：小学校部： ☆林 道子<金沢市立中央小学校教諭>[市小教研書写副部長]
木本峰生<七尾市立徳田小学校長>
☆丹後誠仁<鹿島町立久江小学校長>

：中学校部： ☆西田 稔 <金沢粒高尾台中学校教頭>[市中教研書写副部長]
谷村修次<小松市立御幸中学校長>

：高校部： 林 昭悦<県立津幡高等学校教諭>

：盲・ろう・養護学校部：☆田中行雄<點明和養護学校教頭> [県特殊教育諸学校
教頭会理事長]

監事 奥井絹江<七尾市立有磯小学校長>☆松本勝雄<中島町立熊木小学校長>

理事 : 県教委学校指導課 :

[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] ☆帽子山瑞枝<県教委七尾地方事務所>
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 清水 実

* 金沢地区

- : 幼・保部： 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>
- : 小学校部： 大浦 努<花園小学校教諭> 中川晃成<菅原小学校教諭>
- : 中学校部： 福島絹子<大徳中学校教諭> 古本佳世<芝原中学校教諭>
- : 高校部： 石浦義彦<金沢伏見高校教諭> 永江芳教<金沢商業高校教諭>
☆久田英夫<金沢中央高校教諭>
- : 大学部： 北室正枝<金沢美大講師>
- : 盲・ろう・養護部： 平杉吉次<県立養護学校校長>

* 加賀地区

- : 小学校部： 表 英治<片山津小学校長>阿戸壮一郎<小松市教委学校教育課長
川筋登史己<犬丸小学校長>☆北野勝彦<国府小学校長>
- : 中学校部： 小座間美智子<錦城中学校教諭>
- : 高校部： 東野洋子<小松市立女子高校教諭>

* 能登地区

- : 小学校部： 福田教導<越路小学校教頭> 濱 和子<豊川小学校教頭>
野村美智子<石崎小学校長>
- : 中学校部： 永井志津子<北嶺中学校長> ☆山田寿一 <能登島中学校教頭>
- : 高校部： 懈喜代子<県立水産高校教諭> 大場豊治<七尾城北高校教諭>
- : 盲・ろう・養護部： ☆清水徳典<七尾養護学校教諭>

事務局

- : 事務局長： ☆永江芳教<金沢商業高校教諭>
- : 副事務局長： 中川晃成<菅原小学校教諭>

- : 庶務部：
部長・岩田稚子<森本中学校教諭> 副部長・山口雅美<新竪町小学校教諭>
部員・北村千恵<南郷小学校教諭> ・山沢聡美<片山津中学校教諭>

- : 会計部：
部長・佃さえ子<美川小学校教諭> 副部長・西尾恵美子<辰口中央小学校教諭>
部員・水上真由美<県立医王養護学校教諭>

- : 研究調査部：
部長・板橋法子<安宅小学校教諭> 副部長・北野京子<中条小学校教諭>
部員・寺井純子<蛸島小学校教諭> ・唐津清美<増徳小学校講師> ・坂井雪絵

- : 会報部：
部長・八田和幸<浅野川中学校教諭>副部長・松井瑞代<大聖寺高校講師>
部員・中辻育代<浜小学校教諭> ・田中学<尾山台高校講師>
・塩田由香<野々市中学校講師>

(☆は新任)

第6回石川県書写書道教育研究大会役員 一敬称略一

顧問	金子曾政	寺西盛雄			
参与	北西正二	坂口 敏	田島庄吉	久田久信	氷田茂良
	横西 清	吉田一郎	森川登夫		
大会長	藤 則雄				
副大会長	中谷一男	源 通	河本隆成	寺井亮三	南谷直彦
	南 進	押木秀樹	中山武久		
実行委員長	丹後誠仁				
副実行委員長	林 道子	永井志津子	谷村修次	西田 稔	林 昭悦
	田中行雄	福田教導			
実行委員	[部担当]	[総務部]	福田教導	濱 和子	山田寿一
		[研究集録編集部]	清水徳典		
		[記録部]	松山常照		
		[会計部]	高木宣廣	北浜信喜	
大会事務局	[事務局長]	永江芳教	[副事務局長]	中川晃成	
○女子-7	[庶務部]	0岩田稚子	s 山口雅美	北村千恵	山沢聡美
s 男子-7	(庶務部)				
	[集録編集部]	0八田和幸	s 松井瑞代	中辻育代	田中 学
	(会報部)				塩田由香
	[記録部]	0板橋法子	s 北野京子	坂井雪絵	寺井純子
	(研究調査部)				唐津清美
	[会計部]	0佃さえ子	s 西尾恵美子	水上真由美	
	(会計部)				

石川県書写書道教育連盟 規約

- 第 1 条 (名 称) 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。
- 第 2 条 (本部・事務局) 本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。
- 第 3 条 (目 的) 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第 4 条 (事 業) 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 関連する学会・研究会・内外諸機関等との連絡と協力
 - (4) 講演会・講習会の開催
 - (5) 調査研究
 - (6) その他必要な事業
- 第 5 条 (組 織) 本会は、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。
- 第 6 条 (役 員) 本会に、下記の役員をおく。
- | | | | | | |
|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 会 長 | 1 名 | 副会長 | 若干名 | 理事長 | 1 名 |
| 副理事長 | 若干名 | 監 事 | 若干名 | 理 事 | 若干名 |
| 事務局長 | 1 名 | 副事務局長 | 若干名 | | |
- (1) 事務局には、次の六部を設け、各部とも、部長 1 名 副部長 1 名、部員若干名をおくものとする。
・庶務部・会計部・研究部・会報部・研修部・調査部
 - (2) 本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。
 - (3) 役員を選出と任期は、下記のように定める。
 - (I) 役員は理事会において選出する。
 - (II) 役員は任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第 7 条 (理事會) 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する
- (I) 理事会は、必要に応じて、会長が召集する。
 - (II) 理事会は、第 6 条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。
- 第 8 条 (会 計) 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 9 条 (会計年度) 本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。
- 第 10 条 (監 査) 本会の会計は、監事によって監査をうける。

[附 則]

- 第 11 条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8 月 29 日 制定
平成 2 年 5 月 18 日 一部改正